

姪奴と甥奴（前編）

繁殖奴隷にされる姉と
男の娘に改造される弟



濠門長恭

目次

登場人物	- 3 -
0. 特別閉鎖病棟	- 5 -
1. 奴隷化宣告	- 19 -
2. 筆下ろしと初アナル	- 71 -
3. 馴致の始まり	
4. 閉ざされた逃げ道	
5. 実技教育	
6. 歪な日常	
後書き	

登場人物

近藤悠莉愛

1年生

ノーマルな性的指向の持ち主（と、自分では思っている）。

ぎりぎりCカップ。

今年の夏にナンパされて、経験人数1。

近藤尋海（広美）

悠莉愛と3歳違いの弟。姉が初体験したと同じ頃、精通を経験。未発毛。Hな事柄には興味津々。M性向有り？

近藤華枝

在学中に妊娠が発覚して中退。両親の強制で、別の男と結婚させられて悠莉愛を産む。尋海は、その男とのあいだの子供。

出城勇介

華枝の兄。建設会社社長。引退した両親は海外で余生を楽しんでいる。勇介の性癖に愛想を尽かした妻は、東京の進学校に行ったひとり息子の世話を口実に東京で暮らしている。事実上の離婚状態。

前田真帆

高給で釣られて住み込みの「猥婦」をしている。マゾっ気は強いが、年下に対しては（男女を問わず）サディスチンの一面も。

津村和臣

悠莉愛と尋海を調教するために、SMサークルの紹介で雇われた。ドSのバイセクシャルだが、とくに少年を好む。過去にはウリの経験も有り。

0. 特別閉鎖病棟

窓に鉄格子の嵌った、淡いピンク色の小さな部屋。裸の女が四つん這いになって、腰を揺すっている。

「うああ……いい！ いっちゃうう！」

女は点滴スタンドを横倒しにして跨っている。太い丸みを帯びた三脚の一本が、女の股間に突き刺さっていた。

「うあああ！ もっとはげしくついてよう！」

ずちゅずちゅ……湿った音が女の股間から間断なくこぼれる。

女はショートボブを振り乱して、激しく腰を上下させ、快感を求めて前後左右にくねらせている。

バタン！

ドアが開いて、セーラー服姿の少女が部屋に駆け込んだ。

「やめて！ ママ、やめてよ！」

声をかけられても、女は振り返りもせずに腰を振り続ける。

「やめてったら！ 悠莉^{ゆり}愛^あよ。ねえ、わかる？」

肩を揺すられて、女が動きを止めた。ゆっくりと、数秒をかけて少女を振り返った。

「ゆりあ……なの？」

女は霧を眺めるように少女の顔を見た。

「そうよ、悠莉愛よ。尋海^{ひろみ}も来てるのよ」

だぶついた詰襟学生服の少年が、恰幅のよい中年男に押し出されるようにして、姉の横に並んだ。顔をそむけて、無言。

少年のほうはそれほどでもないが、姉の顔は母親に瓜二つだった。ショートボブとポニーテール。髪形を同じにすれば見分けがつかなくなるほど——母親は若い。

「このひとねえ……すごく、かたいの。ママをなんどもなんどもイカせてくれるの」

女の目には、点滴スタンドが筋骨たくましい男にでも見えているのだろう。

「ごめんなさいねえ。このこたちはきにしないでいいわ」

裸の女が点滴スタンドに語りかけ、膝を使って腰を上下に揺すり始めた。

姉弟が物心ついたときからそうだったように、今も無毛の股間に、太く硬い異物が入り出す様が、はっきりと見えた。

「くううう……いい。おっぱいももんでよ。
おまめちゃんもつねってえ！」

口走りながら、それを自分の手で実行する。
その狂態を呆然と眺めていた少女が、ぱつと身をひるがえして部屋から逃げ去った。

「あ……」

少年も我にかえって姉を追いかける。

スーツ姿の中年男は、悠然と姉弟の後について行く。

病室のドアが閉じられて、女の嬌声も締め出された。

「見ないほうがよかったんじゃないかな？」

中年男が姉の背中に声をかけた。

少女は振り返って。

「母は……ほんとうに、正常に戻れるんでしょうか？」

男に質問した。

「私が責任を持って治療にあたります」

三人の様子を見守っていた白衣の男が声をかけた。スーツの男よりは歳を食っている。

「当院ではアメリカ精神医学会の最新マニュアルに沿って、治療を行なっています。保険適用外の医薬品も、出城さんの御要望どおり、

費用を気にせずに使っていきます。医療刑務所では不可能でしょうが、ここでなら、必ず近藤華枝さんを完治させて、覚醒剤とも縁を切らせます」

中年男に話しかける態を装って、言外に姉弟を不安がらせるような物言いだった。

「よろしくお願いします」

少女が、医師に向かって頭を下げた。それから。

「いろいろとご迷惑をかけますが、どうか、母のことをよろしくお願いします」

出城に向き直って、よりいっそう深々と頭を下げた。

「もちろんだとも。では、納得したんだね？」

「はい。伯父様のおっしゃるとおり、お世話になります」

伯父——つまり、この男は悠莉愛たちの母親の兄なのだが、少なくとも容貌は、まるで似たところがなかった。

母親は、いわゆるうりざね顔で、化粧をすれば二十代前半で通用するほどだった。それに比べてこの男は、野球のホームベースに太い眉と分厚い唇が貼り付けられている。

その太い眉が少しだけなごんで、分厚い唇の端がちょっと吊りあがった。

「身の回りの整理もあるだろうから、うちに来てもらうのは来週の金曜日にしよう。和臣くん——車を運転していた青年だ。彼にも手伝いに行かせる」

「はい。よろしくお願ひします」

もう一度、少女が頭を下げる。弟も、それにならった。

四人は廊下を引き返し、カードロック式の扉を開けて、その先のエレベーターに乗った。医師だけが途中で下りる。

1階のいちばん奥に隠されているエレベーターを降りて、迷路のような廊下を通過して、玄関へ出る。

黒塗りのセダンが三人の前で停まった。運転席には、出城よりもがっしりした体軀の青年が座っている。

「きみたちは、先に帰りなさい。僕は、まだ先生と話がある。和臣くん、二人を送ってやってくれ」

「先輩は？」

「タクシーで帰る」

出城は姉弟を追い立てるように車に乗せた。車が動き出すと、見送ることなく背を向けて、病院へ引き返す。

姉弟の母親である近藤華枝は、覚醒剤所持と使用の現行犯で逮捕された。だけでなく、販売目的所持と売春斡旋の容疑も掛けられている。つまり。自分が主催した乱交パーティーに覚醒剤を持ち込んで参加者ともども使用していた現場に踏み込まれたのだった。

悠莉愛はインターネットで弁護士に無料相談したが、懲役八年くらいが相場だろうと教えられた。

近藤悠莉愛と尋海の姉弟は、途方に暮れた。というよりは、呆然自失に陥った。

母と子の母子家庭で母がいなくなれば、だいいちに生計が成り立たない。唯一の保護者が刑務所に入れられてしまえば、姉弟は施設に保護されるだろう。姉が学校を辞めて働くという道もあるが、身寄りのない少女を雇うところがあるか疑問だった。

そんな窮状に救いの手を差し伸べたのが、出城勇介だった。華枝の兄、姉弟の伯父だと

いうが、ふたりは彼の存在をまったく知らなかった。

建設会社のオーナー社長である勇介の行動は迅速で強引だった。

私選弁護人を雇って、まず保釈を勝ち取った。そして、覚醒剤中毒の治療のために精神病院へ入院させた。

「無罪は無理だが、執行猶予は可能だ」

勇介は自信たっぷりに言う。私選弁護人の説明によると――

被告は完全に覚醒剤をやめられる、再犯のおそれがないと、裁判官の心証を形成する必要がある。じゅうぶんな治療はもちろんだが、退院後も華枝を後見する人物が必要だった。

「退院後は、親子そろって出城家で暮らしてもらおう」

勇介は、それが既定の事実であるかのように断言した。

言葉だけでは、裁判官への訴求力が弱い。すでに姉弟は勇介と同居しているという実態が必要だった。

「明日にでも、うちへ来なさい」

姉弟は、いきなりの話に面食らった。伯父

とはいえ、これまで一度も会ったことのない男の家族と同居するのは気が進まなかった。

しかし、賃貸マンションは近いうちに退去しなければならない。施設に保護されるか伯父の家族と同居するか、どちらかしかない。

母の狂態を見せつけられて、医療刑務所では正気に戻せないなどと脅されては――姉弟は伯父の提案に従うしかないのだった。

勇介は、特定の職員しか持たされていないはずのカードを使って扉を開け、特別隔離区画にはいった。名札の出ていない病室のひとつを、迷うことなく開ける。

華枝は、おとなしくベッドに寝ていた。手足を大の字に引き広げられて、ベッドの四隅に取り付けられた革枷に拘束されている。腰の下に分厚いクッションをあてがわれて股間を突き出した姿勢で、膝、太腿、腰、胸、両肘、そして首にまでも太い革ベルトがぎちぎちに巻き付けられている。彼女が動かせるのは、頭と指先だけだった。

そんな扱いを、華枝は黙って受け容れている。口には大きなボールギャグを噛まされて

いるのだから、言葉を発せない。

華枝への処置は、まだ終わっていなかった。姉弟に母親の治療を安請け合いした医師——この病院の院長が、華枝の身体に電極を取り付けていく。乳房と脇腹と太腿と鼠蹊部と、クッションで浮かされた尻には湿布のような金属箔を、乳首とクリトリスにはバネを弱めてある小さなクリップを。そして股間には。直径五センチほどもある金属棒が——経産婦とは思えないほど色素沈着の少ない小ぶりの肉襞を割って奥深くまで挿入された。そのすぐ下にも、ひとまわり小さな金属棒。

「んんんん……」

華枝がくぐもった呻き声をあげたが、苦痛に喘ぐといった感じではなかった。

「ずいぶんとおとなしくなりましたな」

勇介が妹の顔を見ながら言う。

「瞬間興奮剤は、すぐに醒めます。もつとも、抗うつ薬も持続性の脱法ドラッグも、まだ効いていますがね」

つまり華枝は、極端な躁状態にされたうえに性的興奮を瞬間的に高める薬まで投与されて——子供たちの前で狂態を強制されていた

のだ。壁には強化ガラスで保護されたワイド画面が埋め込まれているが、直前まで違法ポルノが映されてもいた。これだけの処置をされれば、処女でさえも点滴スタンドの脚を股間に突っ込んでいたかもしれない。

「薬が切れるまで甦る趣向ですか」

「とんでもない。見事に大役を果たした主演女優には、それなりにボーナスを与えます」

ベッドの脇には、タワー型PCほどの装置がキャスターに乗せられている。医師は、電極から伸びるコードを装置につなぎ込んだ。

「薬効が切れるどころか、明日の朝までも天国に逝かせてやりますよ」

医師が装置のスイッチを入れると、華枝の裸身がびくんと跳ねた。

「低周波をメインにして、高電圧はスパイス程度に」

全身の筋肉が低周波のリズムに合わせて、びくんびくんと跳ね続ける。

「ん……んっ……んんんん」

呻き声は甘く切迫していた。

点滴スタンドから得ていた局所への苦痛を伴う荒々しい快感ではなく、骨まで蕩かされ

るような純粹の快感を、華枝は全身で感じている。

もっとも。乳首やクリトリスのクリップ、そして二本の太い電極に高電圧を流せば、華枝を壮絶な電撃地獄にのたうちまわせることもできる。

至高の快感と究極の地獄。ふたつを使い分ければ、どんな女でも従順なマゾに馴致できると、この医師は豪語している。事実、彼はこれまでに二十人ちかくの、初潮前の娘から更年期の女まで、はては男の娘もマゾ奴隷に仕立ててきた。華枝も七年前に、ここでマゾ堕ちさせられている。

ほとんどの「特別隔離治療」は、クライアントから高額で受けた依頼だったとはいえ、専用の区画を設けて専任のスタッフも雇っているのだから、費用は持ち出しになっている。つまりは趣味なのだ。その証拠に、どれだけ札束を積まれても筋骨逞しいノンケの男は受け付けていない。

「んんんんっ！ んん、んんん……」

嚴重に拘束された身体をひくつかせ、頭を激しく左右に振りながら、華枝は絶頂に向か

おうとしていた。

出城は、そんな妹の淫惨な姿を冷ややかに見下ろしている。

「上野先生はフェミニストでいらっしゃるが、こんな女は……」

床に転がっている華枝の室内履きを勇介が拾いあげた。

「こっちのほうを悦びますよ」

妹の股間を突き刺している太い電極に室内履きを叩きつけた。

バシン！

「んぐぶふーっ！！」

膣奥を突き破るほどの衝撃に、華枝は封じられている声が許すかぎりにも叫んだ。全身を激しく痙攣させると、どすんと腰をクッションに打ちつけて、そのまま動かなくなった。

「なるほど……脈拍も膣圧も一気にレッドゾーンまで振り切りましたな」

電気刺激装置の横に置かれたモニターを見て、苦笑する上野。

華枝の裸身には、電気刺激のための電極だけではなく、各種のバイタルセンサーも貼り付けられている。電気刺激装置はその値をモ

ニタリングしながら、あらかじめプログラムされているパターン（性的陶酔もあれば肉体的激痛もある）に追随するように、刺激を自動制御している。

上野の言うレッドゾーンとは、制御プログラムには禁じられている極端な快樂ないし苦痛だった。

「念のために強心剤を入れておきましょう」

彼は点滴スタンドを本来の目的に使った。

「患者が意識を回復すれば、Heaven & Hell Trainer も作動を再開します。それはモニターで見ることにして、軽く一杯いかがですか」

出城をうながして、返事を待つ。歳は上野のほうがひとまわり上だが、出城はクライアントというだけでなくスポンサーの一人でもあった。

「そうですね。放置プレイといきましょう」

出城が先に立って、病室を出る。

「もしも、お手に余るようでしたら、いつでも入院を受け付けますよ」

出城に並びかけて上野が営業トークめいたことを言う。

「まさか。二度とは得られん獲物だ。じっく

り料理してやる。華枝のときみたいなへまはせんさ」

「それでは、お手並み拝見といきますか」

二人のサディストは、顔を見合わせて冷酷に唇を歪めた。

1. 奴隷化宣告

黒塗りのセダンが停まったのは、四十メートルほども続く土塀の中ほど、時代劇に出てくるような大門の手前だった。二台の車が楽にすれ違えるほどの大門が、ゆっくりと開く。「うわあ……！」

個人の持ち家とは信じられない規模と迫力とに、車の中で尋海が嘆声を漏らした。

事実。江戸時代には家老の屋敷だった。以来、出城家の当主はこの屋敷に住み続けている。何度も改修し建て直してもいるが、周囲に合わせて洋風にしたりはせず、高級住宅街の中でも格の違いを見せつけている。

大門が開き切ると、和臣はゆっくりと車を乗り入れた。門のすぐ横がガレージ。飛行機の格納庫かというほどの大きさだった。

「ちょっと待っていてね」

悠莉愛と尋海は車から降ろされた。ふたりとも、わずかな手荷物しか持っていない。身の回り品のほとんどは和臣の手配で、業者が段ボール箱に詰めて先に運んであった。家具

類は、出城勇介の意向で処分してしまった。

ガレージのシャッターが開く横では、大門がゆっくりと閉じかけている。時代劇とは違って、門扉は電動だった。

「うわあ……！」

尋海がガレージの中を覗いて、また嘆声を発した。大排気量のスポーツカー、チャンピオンカー、RV、コンパクトカー、軽自動車。尋海たちを乗せてきたセダンを含めると六台にもなる。

「お待たせ」

車をガレージに入れた和臣が屋敷に向かう。後ろについて歩きながら、悠莉愛は弟のように驚きを声に出したりはしなかったが――和風庭園の豪勢さに目をみはっていた。

江戸時代から生えていたに違いない松の巨木、中で泳げそうな（それには中央の石橋が邪魔になるが）大きな池。芝生と玉砂利を敷き詰めて踏み石を配した道。テレビ番組でどこそこの名園と紹介されそうな美しさだった。

敷地の広大さに比例して、母屋も大きかった。まん中に突き出している玄関口だけで、小さな戸建ほどもありそうだ。

「お帰りなさいませ」

床に座った若い女性が、和臣たちを出迎えた。

「ええっ……！？」

尋海が三度目の驚きの声を発した。これまでとはトーンが違っていた。

(……………！？)

悠莉愛も仰天している。その女性は、素肌にエプロンだけを身に着けていたのだ。エプロンワンピースとかではなく、キッチンウェアとしてのエプロンだった。胸当てが小さくて、上乳も横乳もはみ出ている。前掛けが短いので、太腿がまるごと露出している。

「御主人様がお待ちかねです。ついてらっしゃい」

裸エプロンの女性が立ち上がって、三人に背中を向けた。

四度目の奇声はなかった。尋海も悠莉愛も目を大きく見開いて、その場で固まっている。

裸エプロンの女性の背中と尻に、細く赤い筋が何本も浮かんでいたのだった。SMに興味のない者でも、それが鞭の痕だとひと目でわかる。

裸エプロンの女性の腕や手首にも赤い痣が刻まれているのに、悠莉愛はあらためて気づいた。縄で縛られた跡だろう。

(いったい、この女は……？)

伯母——勇介の妻は、東京の進学校に通うひとり息子の世話で、二年前からそちらに住んでいると聞かされていた。鬼の居ぬ間に風俗嬢でも呼んで、SMプレイをしているのだろうか。しかし、それを若い姪と甥に見せつける伯父の心理が不可解だった。

「ぼうっとしてないで。マホについて行きなさい」

和臣の声で我に還って。姉弟はぎくしゃくした動作で靴を脱いだ。

玄関からは廊下が三方に伸びていた。まっすぐ奥へ続く廊下と、庭園を一望できるガラス戸に沿って左右へ伸びる廊下と。マホと呼ばれた裸エプロンの女性は、左端にある部屋の前へ姉弟を案内した。和臣は、いつの間にか姿を消している。

マホは床に正座してから、部屋の襖をすこしだけ開けて中に声をかけた。

「連れて参りました」

「開けていいぞ」

襖の向こうは、床の間のある座敷だった。座卓の後ろに出城勇介が座っていた。初冬の季節にふさわしく、屋敷の雰囲気にも溶け込んだ厚手の和服を着ている。

「遅くなりました」

奥の襖を開けて、和臣が姿を現わした。

(……………！?)

悠莉愛と尋海は、また驚いた顔になった。

和臣は裸体だった。人懐っこい丸顔に似つかわしくない筋肉の塊りの上に禪だけを締めている。布の幅が広いし生地も厚いから、廻しというべきだろうが、悠莉愛には区別がつかない。

「ぼさっと突っ立ったままで、挨拶も無しか。華枝がどんなふうにおまえたちを躡けてきたか、わかるというものだな」

きめつけられて悠莉愛は反発を感じたが、それは心の奥に押し戻して。マホにならって廊下に正座した。尋海も姉を見習う。

「今日からお世話になります。どうか、よろしくお願いします」

悠莉愛は（時代劇のシーンを思い浮かべな

がら) 神妙に手をついて頭を下げた。

「うむ。先に紹介をしておこう。そこの女は、マホという。真実の真に帆掛け船の帆と書く。僕のワイフだ」

「え？ でも、伯母様は東京だっとうかがいましたけど？」

「ワイフの意味が違う。猥褻な婦人と書いて、ワイフだ」

姪と甥に、堂々と愛人(という悠莉愛の理解は間違っていたが)を紹介する勇介。

「この家で暮らすルールは、ひとつだけだ」
傲岸な物言いだった。

「僕の命令には無条件に従うこと。反抗は許さん」

学校にも、こういうタイプの教師はいる。きっとワンマン社長で、そういうのに慣れているのだろう——くらいにしか、悠莉愛は思わなかった。面白くはなかったけれど、悠莉愛は素直に返事をした。

「はい、そうします。それで……真帆さんも和臣さんも、どうして裸なんですか？」

そして、疑問のほうを優先した。

「僕の趣味だ」

簡潔な返事は答えになっていなかった。

「おまえたちも、素っ裸になれ」

きょとんと顔を上げる悠莉愛。伯父が冗談を言ったのか、自分が聞き違えたのだと思った。

「聞こえなかったのか。着ている服も下着も靴下も脱いで、素っ裸になれと言ったのだ」

勇介の声が威圧的になった。

「厭です」

反射的に悠莉愛は言い返した。当然の反応だった。

「どうして、わたしたちまで伯父様の趣味につきあわなければならないんですか」

「儂の命令に従わんのなら、出て行け。華枝の面倒も見ん。どこでなりと、親子三人で野垂れ死にしろ」

いきなり最終通告を突きつける勇介。

「そ……」

そんな無茶苦茶な。言いたいことと、この場から逃げたときのこととが、頭の中で渦巻いて言葉に詰まった。

自分と弟は、施設でつらい生活を送ることになるが、それでもなんとかなるだろう。し

かし母は、医療刑務所で中途半端な治療を受けただけで社会に放り出されて、また覚醒剤に手を出すかもしれない。

「しかし、儂は優しい男だ。可愛い妹を見捨てるなどできん」

勇介が座卓をはなれて悠莉愛の前に立った。

「儂の命令に従えるよう、手を貸してやろう」

勇介は悠莉愛の背後に回り込むと、腋の下に手を入れて、ゴボウ抜きさながらに悠莉愛を立ち上がらせた。

「きゃ……なにするんですか？」

抗議したときには、がっちり羽交い絞めにされていた。

「姉さん……！？」

腰を浮かしかけた尋海は、和臣に同じように羽交い絞めにされた。

「マホ。悠莉愛を手伝ってやれ」

「はい、御主人様。失礼します」

あらかじめ打ち合わせていたのだろう。真帆は膝をついたまま座敷に上がって、座卓の上からカッターナイフを取ってきた。

チキチキッと刃を伸ばして、悠莉愛のセーターの襟に刃先を差し入れる。

「じっとしててね。あばれると怪我をするわよ」

「やめてください」

悠莉愛はきつい口調で言ったが、身体は凍りついている。刃物を突きつけられるなんて、初めての経験だった。刃先は外を向いているのだから、もがいたくらいでは肌にかすり傷もつかない——と冷静に判断できるはずもなかった。

セーターは縦にまっぷたつにされ、袖も切り開かれて、悠莉愛の身体からはなれた。ブラウスとブラジャーも同じ運命をたどった。

「●六歳のわりには、貧弱な胸だな」

勇介は悠莉愛の左腋下にくぐらせている手で喉首をつかんで動きを封じて、右手で乳房をわしづかみにした。

「痛い。やめてください」

「せいぜいBカップといったところか。バストのサイズは幾つだ？」

「あなたには関係ないことです。こんなこと、やめてください。訴えます」

「この娘、アンダーバストが七十でCカップです」

剥ぎ取ったブラジャーのタグを読んで、真帆がいう。ついでに、女性ならではの辛辣な論評。

「無理をしてるんでしょうね。ほんとは七十五のBが楽なはずですよ」

「物足りんな。まあ、いい。縄で絞り出せば本物のCになる。鞭で腫らしてやればDカップも夢ではない」

勇介はからかいながら、これから悠莉愛をどう扱うか、はっきりと言っている。

カッターナイフはスカートとショーツも布きれに変えてしまった。ハイソックスを脱がされたときには、悠莉愛も逆らわなかった。

なにを言っても無視されるし、力ではかなうはずもない。しかし。

「ここは、ずいぶんとむさ苦しいな」

淫毛をつかんで引っ張られたときは、腰をよじって抗議もした。

「やめて。変なことはしないでください」

「マホ、縄を持ってこい」

勇介は悠莉愛を廊下に引き据えた。手首をつかんで背中にねじ上げて重ねて。手渡された麻縄で、すばやく手首を縛った。

「やめてください。あなたのSM趣味につきあうなんて、厭です。それに……わたし、あなたの姪なんですよ。こんなことして、いいと思ってるんですか」

「いけないに決まっておる。だから、うれしいのだ」

悠莉愛からは見えなかったが。勇介は唇の両端を吊り上げて邪悪に嗤っていた。そのあいだにも、別の縄で胸を巻いて乳房の上下をきつく縛る。最後に、悠莉愛が肩の痛みを訴えるのも無視して手首を縛った縄尻を高く吊り上げて首に巻き付けた。

勇介が身を引いても、もう悠莉愛はなにも言わなかった。何年も監禁されていた女性とか、犯されたあげくに殺されてしまった女の子とか、そういったニュースが頭の中を駆け巡っている。

「さて、おまえはどうする？」

勇介が尋海の前に立った。

「自分で脱ぐか、儂に脱がされるか。どっちにする？」

「あの……言うことをきいたら、縛ったりはしないでくれますか？」

尋海が、口ごもりながらたずねる。

「約束しよう。和臣くん、はなしてやれ」

尋海は、後ろ向きになって服を脱ぎかけた。

「目上の者にケツを向けるな。ちゃんと正面を向け」

尋海は座敷に向き直った。さいわいに、姉の緊縛された裸身は視界からはずれていた。

勇介の機嫌をそこねないようにと、尋海は急いで服を脱いだ。急ぎ過ぎて、かえって手間取る始末だった。先に靴下を脱いで、最後にブリーフに手をかけたときには、さすがに数秒はためらったが、勇介ににらまれるとあわててブリーフを引き下げた。

まだ発毛の兆しもない股間が露わになる。もちろん包茎だ。

すぐに手で隠したが、

「隠すな。両手は後ろで組んでいろ」

きつい声で言われて、ぱっと手を後ろにまわした。女子に比べれば、羞恥心は薄い。

縮こまっているペニスを、勇介が指でつまんだ。

「姉に比べれば、すっきりしとるな。奴隷はこうでなくちゃいかん」

「奴隷ですって？」

勇介の言葉を、悠莉愛が聞きとがめた。

「SMごっこも、たいがいにしてください」

「ごっこではない。おまえたちは、マゾ奴隷としてこの家で飼われるのだ」

「わたしも弟も、マゾなんかじゃありません。こんなこと、性的虐待です。犯罪です」

「儂を侮辱するのは、反抗と同罪だ。いや、もっと罪が重い」

言いながら勇介は、指でつまんだ尋海のペニスを弄んでいる。左右にひねったり、皮を身体の奥まで押し込んで強引に亀頭を露出させたり。

荒々しい刺激を受けて、ペニスが勃起する。「弟に変なことをしないでください。今すぐ縄をほどいてください。いまなら、誰にも言いません。こんなことがニュースになったら、あなたこそ刑務所行きです」

ふう——と、芝居がかった溜め息をつく勇介。廊下に落ちている悠莉愛のショーツの残骸を拾い、それを丸めて鼻先に突きつけた。

「口を開けろ」

意図を察して、悠莉愛は伯父をにらみつけ

たまま、唇を引き結ぶ。

「マホ。こいつの口をこじ開けろ」

そうはさせまいと、顎の筋肉をこわばらせた悠莉愛だったが。

「……きゃ！」

叫びかけて、あわてて口をとぎした。

真帆は悠莉愛の背後にまわって、双つの乳房をわしづかみにしたのだった。

「素直にお口を開けないと、痛い思いをするわよ？」

五本の指を乳房の根元に喰い込ませて、そのままぎりぎりとなじっていく。

「くううう……」

悠莉愛は歯を食いしばって耐えている。

「強情な娘ね」

真帆の右手が乳房からはなれて、淫毛を何本もまとめてつかんでブチブチッと引き抜いた。

「んんんんっ！」

それでも悠莉愛は耐えている。

「もういい。この役立たずめ」

勇介が、悠莉愛にではなく尋海に詰め寄った。不意打ちで腹にパンチを突き入れた。

「……………！」

腹を押さえて声もなく崩れ落ちかかる尋海——を、和臣が羽交い絞めにして立たせた。

「もっときついのを喰らわせてやる。腹筋を固めとかんと、内臓が破裂するかもしれんぞ」
「やめてください」

悠莉愛が、ついに口を開けた。

「どうして、尋海まで虐めるんですか」

「おまえが強情だからだ。おまえが逆らえばさからうほど、弟が痛い目を見る」

「卑怯者……」

悠莉愛は力なく伯父をののしって、そのまま口を半開きにした。そこに、自分のショーツを押し込まれる。さらに、これも座卓の上に用意されていたガムテープで口をふさがれた。布製の粘着力の強いテープで、手を使わなければ剥せない。

酸味の混じった生臭いえぐみが、屈辱とともに口に広がった。

勇介が、また尋海のペニスを弄び始めた。

尋海はまだ苦悶の表情を残したまま、ペニスが勃起していく。

「もう、精通はあったんだろうな？」

数秒の沈黙はためらいではなく、頭の中でセイツウの音を漢字に変換していたせいだった。

「はい。今年の夏です」

問われてもいないことまで答えたのは、尋海はすでに勇介の暴力に屈している証しだった。

「オナニーは、毎日か？」

オナニーをしていると決めつけたが、この場合はそれが正しい。男の子なんて、そんなものだ。

「……三日に一度くらいです」

最初はためらっていた尋海だったが、目の前に握り拳を見せられると、しぶしぶ白状した。

「これからは、勝手に射精することは許さん。儂が許可したときに、儂の目の前でしろ」

ふたりとも射精管理という言葉は知らなかったが、これがSMプレイのひとつらしいとは勘付いた。

「どうせ答えんだろうが、念のために聞いておく」

勇介は、悠莉愛に顔を向けた。

「素直に答えれば、儂に反抗して儂を侮辱した罪を軽くしてやる」

悠莉愛は、真っ向から伯父をにらみつけている。

「おまえは、まだ処女か？」

実は悠莉愛は——偶然の一致に軽い驚きを覚えている。弟の精通と同じ時期にロストバージンしていたのだ。

仲良し三人組で海へ行って、この日のために買った露出過剰な水着（といっても、市販の三角ビキニだが）で、ナンパ待ち。三人連れの大学生に声を掛けられて、その夜に無事卒業した。その相手とは九月の終わりまで交際していたが、夏の魔法が解けて自然解消。経験人数はひとり。最初を含めて五回のデートで八回の挿入（すべてゴム）と三回の生フェラチオ——というのが、悠莉愛の経験のすべてだった。

もちろん、そんなことは、たとえ拷問されても伯父に明かすつもりどない。

悠莉愛は、ぴくりとも頭を動かさないようにしている。悠莉愛の拒絶に、あっさりと勇介は引き下がった（のでは、なかったが）。

「和臣くん。尋海に装身具を着けてやれ」

和臣が座敷の奥の部屋から、SMの小道具（としか、姉弟には見えない）を持ってきた。

革製のごつい首輪を尋海の華奢な喉に巻いて、リードを留める金具に金属手錠をぶら下げた。

和臣が、尋海の手首をねじ上げる。

「痛い……縛らないって、約束したじゃないですか」

「縛らないとは言ったが、手錠で拘束しないとは言わなかったね」

勇介は胡坐をかいた脚の中に悠莉愛の尻を落とし込んで、背後から抱きすくめて身体じゅうを弄っている。

のがれようとする、乳房をねじられ乳首どころかクリトリスまでつねられるので、悠莉愛は、全身をこわばらせて弄虐に耐えるしかなかった。

縄と手錠の違いはあるが――姉弟はそろって後ろ手を高くねじ上げられ、自分の腕の重みで首を絞められる形に拘束された。

「もうひとつ、可愛い首輪を着けてあげよう」

和臣が尋海の包茎を剥きあげて、そこに時

計のバンドのような物を巻き付けた。裏側の小さな留め金具に、細い鎖をつなぐ。

「痛い……はずしてよ」

尋海の幼いペニスが、また勃起しかけていた。しかしカリクビを締めつけられているので、そこだけが極端に細くなっている。

「チ●ポを虐められておっ勃てるとは、マゾの素質じゅうぶんだな」

おまえはどうかな——と言って勇介が懐から取り出したのは洗濯バサミだった。これには、長いタコ糸が結ばれている。

それを目の前で開閉して見せつけられて。クリトリスの包皮をめくられては、SMの知識がほとんどない悠莉愛にも、伯父の意図は明白だった。

「んんん、んんんっ！」

縄が首に擦れるのもかまわず、悠莉愛は激しくかぶりを振った。勇介を後ろに突きのけてのがれようとした。しかし、がっしりと腰を抱えられていては、どうにもならない。

クリトリスに異物が触れたと感じた次の瞬間。電気ショックのような凄まじいスパークが、その一点から脳髄まで突き抜けた。

「んんんんんんーっ！！」

悠莉愛の腰が、びくんと後ろへ逃げて、性熟しかけた尻をすでに勃起させている勇介の肉棒に押し付けた――のに、悠莉愛は気づきもしなかった。

「準備はできたな。では、行くか」

「立ちなさい」

真帆がタコ糸の端を持って、斜め上へ引いた。勇介も尻を持ち上げる。

激痛に引っ張られて、悠莉愛は立ち上がらされた。

勇介が先に立って、その後に尋海をつないだ鎖を持って和臣が続く。

「んんん、んんん……」

あまりの痛さに涙をこぼしながら、悠莉愛がしんがりを歩く。

「そんなへっぴり腰だと、太腿で洗濯バサミををこねくるから、かえって痛いよ。思いきり腰を突き出して歩くほうが楽よ」

経験者のアドバイスだと、真帆が言う。年下の少女に同情するのではなく、大仰な痛みがりを嘲笑っている口調だった。クリトリスへの洗濯バサミなど、勇介にとっては小手

調べにもならない。そのことを、真帆の身体は知っている。

玄関から裏口までまっすぐに続く廊下を抜けて、裸足で裏庭へ連れ出された。真帆は四人を見送って屋敷に残った。まだ昼間。客が訪れないとはかぎらない。

裏庭は表の庭園とは様変わりして、剥き出しの地面に枯葉が積もり、三本だけの雑木も丹精されていない。

勇介は裏庭の隅に建てられている土蔵に向かって。そこがSMのプレイルームだろうとは、クリトリスの激痛に苛まれながら、悠莉愛にも見当がつく。

尋海はなぜ大声で助けを求めないのか——と、疑問に思った悠莉愛だったが。自分も同じようにするだろうと、すぐに思い直した。

大声で助けを求めても、誰の耳にも届かないのではないのか。裏庭のすぐ向こうは雑木林になっているし、分厚い土塀が声を遮る。

今は、なにをされても、逆らわずに耐えるしかないのだ。

『なにをされても』の中に、悠莉愛は最悪の可能性も考えていた。実の姪を裸にして縛

って、こんなひどいことをする男だ。犯されずに済むと思うほうが間違っている。

こんな男にバージンを奪われないでよかったと、それがせめてもの慰めだった。

土蔵の扉が軋みながら開いた。ここも電動になっている。

扉が閉じると、昼間でも薄暗い。が、土蔵の中に据えられた大道具を見分けられないほどではなかった。

悠莉愛は激痛に悶えながらも、おどろおどろしい道具立てに鳥肌が立つ思いだった。

ネットでうっかり見かけることもある三角木馬。人間を磔にする十字架（にしては、横木が一本多い）。梯子を水平に寝かせて一端にウインチが取り付けられているのは、中世の魔女狩りで使われた拷問道具だ。古風な土蔵に中世さながらの拷問道具——だけでなく、ロデオマシンやエアロバイクやランニングマシンも置いてあった。ロデオマシンには太いバイブが二本も垂直に取り付けられているから、使い道はわかる。しかし、あとの二つは——疲れ果てるまで運動を強制する以上の目的があるとは、想像もできなかった。

想像はできないけれど、ここが恐ろしく危険な場所だとはぼんやり理解できる。壁の一角にはAEDと書かれた赤い箱が掛かっている、その下には赤い消火器も置かれている。そういった器具が必要になるような、恐ろしいなにかが、ここで行なわれるのだ。

戦慄のうちに。悠莉愛は縄の緊縛をとかれて、天井から垂れている二本の鎖に手首を左右別々に鉄枷でつながれた。両足には床を這う鎖がつながれた。

ウイイイイ……

勇介が天井から垂れている小さなリモコンボックスを操作すると、チャリチャリと小さな音を立てて、鎖が左右に引っ張られ始めた。悠莉愛は四肢をX字形に引き伸ばされた。踵が浮いたところで、鎖が止まった。

そして、ようやく。クリトリスから洗濯バサミが取り除かれた。ベリベリッとガムテープも剥される。

悠莉愛は、すぐには口の中のショーツの残骸を吐き出さなかった。気丈に伯父をにらみつけてはいても、勝手なことをして叱られるのを恐れていた。本人は決して認めないだろ

うが、屈服に至る最初の兆候だった。

「そんなに自分のパンツがおいしいのか？」

からかわれて、悠莉愛は口の中の詰め物を舌で外へ押し出した。

「お願いします。こんなこと、もうやめてください」

無駄とは思っても、言わずにはいられない。

「虐待通報なんか、しません。誰にも言いませんから……ぐうっ！」

勇介の返事は、腹へのパンチだった。ただ黙らせるためだけの軽いパンチだったろうが、不意を突かれて悠莉愛は息を詰まらせた。

「通報しようとして警察に駆け込もうと、できるものならやってみろ」

伯父は逮捕されて、母を助けてくれる者がいなくなる。そういう意味に悠莉愛は伯父の言葉を解釈したのだが。違っていた。

「おまえたちが外へ出られるのは、奴隷として僕に服従してからだ」

「奴隷……？」

これまでも伯父は、奴隷という言葉は何度も使っている。嫌悪と軽蔑は感じたが、SMプレイだろうと理解して、あまり深くは考

えなかった。しかし、そんな生易しいものではなさそうだと、悠莉愛は気づき始めていた。

「姪の奴隷と甥の奴隷。さしずめ、メイドとオイドだな。文字通りに、そう扱ってやる」

言葉の後半は理解できなかった。

勇介は和臣と尋海に向き直った。

「そいつは、姉ほど反抗的ではなかったな。逆らえばどうなるか、見学させておけ」

土蔵の一角に太い柱が立っている。尋海はその柱を背中に抱く形で手錠を掛け直された。首輪はそのままだが、カリクビ輪だけは許された――のが、よかったかどうか。下腹部に密着するほどに、ペニスが勃起してしまった。その状態では、ピンク色の亀頭も半分は露出する。

「姉の裸を見ておっ勃てるとは、とんだ変態だな」

「違う。そんなんじゃない」

「へええ。それじゃ、素っ裸で縛られて興奮してるのか。とんだドMだな」

「……………」

尋海はうつむいて口を閉ざした。なぜ勃起しているのか、自分でもわからなかった。た

だ、胸が締め付けられるような息苦しさを感
じていた。

勇介が着物を脱いだ。五角形のいかつい顔
にふさわしく、がっしりした肉体だった。

腰には越中褌を締めている。悠莉愛は、伯
父が女性用の丁字帯を着けていると勘違いし
て、軽蔑の念を深くした。と同時に。そこが
あまり盛り上がっていないのを見て——口で
はどう言っても、姪の裸身を見て性欲を覚
えるほどには鬼畜でないのだと、すこしだけ安
心した。

性欲のままに若い女体を弄ぶのではなく、
獲物の反応をみきわめながら調教を進めてい
くサディストの冷徹さを、悠莉愛は知らない。
「まずは、その身体から反抗心を叩き出して
やろう」

勇介は長さ八十センチの樹脂製の笞を手
にして、悠莉愛の目の前でヒュンツと素振り
をくれた。

それでも、悠莉愛は怪訝そうに伯父と笞
を見比べている。短い釣竿で叩かれたところ
で、たいして痛くないだろうと高を括っている。

勇介が悠莉愛の背後にまわった。

ヒュンッ……ビシッ！

不意打ちに、笞を悠莉愛の尻に叩きつけた。

「きゃひゃあっ……！」

悠莉愛は、痛みと驚きが緋い交ぜになった悲鳴をあげた。たいして痛くないどころか、肉まで切り裂かれたと信じたほどの激痛だった。

ヒュンッ……ビシイッ！

ビュンッ……ビッシイン！

ひと打ちごとに、笞の音に凶暴さが加わっていく。

「やめて！ もう、やめてください！」

悠莉愛は泣きながら懇願した。

「ひゃっ……」

大きく開かされた両脚の交点——アヌスを笞の先でつつかれて、小さく悲鳴をあげる悠莉愛。

「おまえたち奴隷には『やめて』とか『いや』は禁句だ」

「……………」

「こういうときは、自分のことを言え。痛くて耐えられないとかな。もちろん、丁寧語を

忘れるなよ」

「お願いです。もう、姉さんをゆるしてあげてください」

さすがに、尋海のペニスは萎えている。

「横から口をはさむんじゃない。どうしてもというなら、姉の身代わりを懇願しろ」

「コンガン……？」

「土下座してお願いすることさ」

和臣が尋海のペニスをつかんで、乱暴にしごく。たちまち、勃起する。

「あの、ええと……羞ずかしいです」

と、これは和臣への言葉。

「なら、もっと羞ずかしくしてやるよ」

和臣は包茎を完全に剥きあげて、唾で湿した指でカリクビを急速にこすった。しかし、指に力を入れていない。

「あ……やめて。出……」

言い終らないうちに、幼いなりに硬く怒張したペニスの先端から白濁が噴出した。正面に立った和臣の胸に、どろりとした精液が飛び散った。

「行儀の悪いガキだな」

「ごめんなさい。あんなことするから……」

パシン。

軽くビンタをくれてから、和臣は壁の棚からティッシュを取って汚れを拭った。それを、尋海の口に突きつける。

「自分の不始末は自分で責任を取れ」

尋海は恨めし気に和臣を見上げて、しかし素直に口を開けた。逆らえば今度もまた——自分にか姉にかはわからないが、腹パンチだろう。

尋海は何度も口を動かして、どうにかティッシュを丸呑みした。

「誰も食べろとまでは言っていないのにな。やはり、おまえはドMだ」

からかわれて、尋海はむっとした顔を相手に向けた。

「目上の者の顔を見るんじゃない。奴隷は自分が奉仕する部分——チ●ポを見つめている」

ほんとうに和臣の股間を見ているかどうかはともかく、尋海は顔をうつむけた。

「さて、どうする？」

悠莉愛の傷ついた尻や縄跡の刻まれた乳房を弄んでいた勇介が、幕間劇が終わるのを待って尋海に声をかけた。

「え……？」

「姉の身代わりになりたいのか？」

「弟は関係ないです。虐めるなら、わたしを虐めてください」

「虐めてほしいのか？」

「痛いのは厭です。でも……」

「反抗心が叩き出されてしまったのなら、赦してやってもいいんだぞ？」

悠莉愛は、弟と同じように目を伏せた。

「はい……もう、逆らいません」

「ふむ……」

勇介がリモコンのボタンを押した。

ウイイイイ……

あっさりと悠莉愛は鎖の拘束から解放された——のでは、なかった。

「ひざまずけ」

膝立ちになった悠莉愛の前に立って、勇介は越中禪をずらして、まだ半勃ちの逸物をひねり出した。

「舐めろ、しゃぶれ、儂を勃たせろ」

わざと卑猥に、そして傲岸に命じる。

「厭です。ねえ、伯父様。わたしたち、肉親なんですよ」

無駄とはわかっているけど、言わなければ伯父の行為を認めてしまうことになる。

勇介は、黙って後ろにさがった。ふたたびリモコンを手にする。

ウィイイイ……

「もう、やめてください！ 厭、いやあ！」

金切り声の叫びも虚しく、悠莉愛はまた宙に磔けられた。いや、今度はつま先も床に届いていなかった。

「ケツでは生ぬるいか。やはり、心を直接に叩かねば効き目は薄いな」

勇介が笞の先で乳房をつついた。

「そ、そんな……！？」

悠莉愛の顔が蒼ざめた。カチカチと歯が震える。

勇介が笞を水平に構えた。

ヒュンツ……パシイン！

「きゃあああっ！」

ぎゅっつつむった目の中で、まっ赤な光が爆発した。まっふたつに乳房を切り裂かれたような激痛。

ヒュンツ……パシイン！

「きゃあああっ……やめて！ わかりました。」

フェラチオでもなんでもします。だから、もう赦してください」

「『やめて』は禁句だ。それから、交換条件など持ち出すな。なにかしたいことがあるなら、きちんとお願いするんだ」

ヒュンッ……パシイン！

「ひいいっ……痛いです。お願いです、フェラチオをさせてください」

とっさに考えて、悠莉愛はそう言った。口にすると、自分がひどく惨めに思えた。

「若い娘がフェラチオを連呼するとは、はしたない。そんなに、僕の魔羅をしゃぶりたいのか？」

「……はい」

ウイイイイ……

ふたたび、悠莉愛は床にひざまずいた。意を決して、目の前に突きつけられた半勃ちの肉棒を口に咥えた。

むわっと異臭が鼻をつく。チーズと烏賊を混ぜこぜにしたような臭いは、実のところ最初の相手とそんなに変わらないのだが、心の向きが真反対だから、耐えられない悪臭に感じるのだった。

肉棒の根元をつかもうとすると、手で払いのけられた。

「横着をするな。手は後ろに組んでおれ。喉の奥まで啞え込むんだ」

悠莉愛は、言われたとおりにした。そして、命令される前から積極的に舌をうごめかせ、頭を前後に揺すった。そうしないと男が満足しないくらいは、もう体験している。

たちまちに肉棒が悠莉愛の口いっぱいに怒張する。

(犯されるよりは……)

このまま射精させてしまおうと、悠莉愛は考えた。伯父は、もう若くない。一日に一発がせいぜいだろうと、勇介(というよりは中年男)の精力を悠莉愛は見くびっていた。

「んっ、んっ、んん……」

手でしごけないぶん、大きく頭を揺すって、カリクビも裏筋も熱心に舐めた。

それでも、勇介は満足しなかったのか。ただ辱めることが目的だったのか。

「ええい、まだるっこしい」

悠莉愛の頭を両手でつかんで、さらに激しく前後に突き動かした。同時に、みずからも

荒腰を使う。

「んぐぐ……」

ほんとうに喉の奥まで突かれて、悠莉愛は吐き気を覚えた。それを我慢して、伯父のしたいようにさせる。その甲斐あって……

「出すぞ。吐き出すなよ、呑み込め」

悠莉愛にとっては生涯で二度目の口内射精だった。夏に体験したときより勢いが強く、量も多いように感じられた。

怒張が引き抜かれる。まったく衰えていないが、悠莉愛はそれにも気づかない。口いっぱいに広がった消毒液のような臭いのする粘っこい液体を呑み下そうとして、生理的嫌悪感と格闘している。ゴックンという言葉は知っているが、初めての試みだった。それも、好きな男のそれではなく、憎み軽蔑している男のそれを。

三十秒はかけて、ようやく嚥下できた。

ウイイイイ……

みたび、鎖が悠莉愛の四肢を引っ張り始めた。

「え……どうして？」

「おまえは僕に服従を誓ったから、最初の調

教は終わった。しかし、数々の暴言と無礼な態度への懲罰が、まだ残っている」

「そんなのって……詐欺じゃないですか」

「暴言が、またひとつ増えたな」

「あ……ごめんなさい。これからは気をつけます。もう赦してください」

尻と乳房への、華奢な笞の数発だけで、悠莉愛はすっかり怯えていた。いや——すべてはこの場かぎりのことで、これからは普通の生活に戻れるというのなら、気絶するまでも耐え抜いたかもしれない。しかし、明日も明後日も——もしかしたら母の執行猶予が明けるまでの何年間もこれが続くだろうという絶望が、悠莉愛の気力をくじいていた。

本人は、最悪の場合は母を見捨てることも選択肢に入れているつもりでも、行動の根本を支配している無意識の裡では、すでに勇介の支配を受け容れつつあったのだ。

「では、つぎの命令だ。懲罰が終わるまで、口を利くな。悲鳴も許さん。黙って懲罰に耐えている」

「……………」

悠莉愛は、さっそく命令に従った——わけ

ではない。驚きと諦め、怒りと絶望とに言葉を失っていた。

「命令を守る自信がないなら、さっきみたいに猿轡を咬ませてやってもいいぞ。どうする？」

悠莉愛は伯父をにらみつけて、それから力なくうなずいた。悲鳴をあげないで済む懲罰だとは思えない。それを口実に罰が増やされるのもわかりきっている。どんな屈辱でも、肉体への加虐よりはましだと思った。

「よかろう」

勇介は越中禪を腰からはずした。それを丸めて、悠莉愛の口に突きつけた。

「……………」

自分のショーツを啜えさせられるのだと思っていたが、まさかこの男の下着とは。それでも、悠莉愛はしぶしぶ口を開けた。

ぐぼっと布を突っ込まれて、勇介の体温と体臭とが口いっぱい広がった。越中禪の紐を頬に巻きつけられて、吐き出せなくされた。

「素っ裸だと、やはり羞ずかしいものだな」

素っ裸で空中に磔けられている悠莉愛を言葉で罵って、勇介は脱いだ着物のたもとから

パンツを取り出して穿いた。面積の小さなブーメラン型だが、年齢のわりに引き締まった肉体には、見苦しいというほどではなかった。

「同じ笞では面白くないな」

勇介が壁に掛けてある一本鞭を手を取った。

身の毛もよだつ大道具類に目を奪われていて悠莉愛は気づかなかったのだが、壁にはさまざまな小道具が掛けられていた。材質や太さの違う縄はもちろん、手錠や足枷その他の拘束具、鞭もSMショップ顔負けの品ぞろえだった。

「本来の懲罰には九尾鞭かワイヤー鞭を使うのだが、最初だから甘やかしてやろう」

巻いてある一本鞭を伸ばすと、二メートル近い長さになった。

スナップを利かせて鞭を振り出し、手首を返して鞭を引き戻す。

シュウン、パシッ！

悠莉愛が、びくっと身をすくめた。さっきの笞より何倍も痛いだろうとは、容易に想像できた。

「まずは小手調べだな」

悠莉愛の正面に立って、勇介が鞭を左右に

引き伸ばした。

シュウン、バシイッ！

「んんんっ……！」

乳房のすぐ上を真一文字に打たれて、悠莉愛は猿轡の中に悲鳴を吐き出した。

見下ろすと、乳房の笞痕よりも太くて長いまっ赤な鞭痕が、くっきりと刻まれていた。

シュン、バシイッ！

へそのすぐ下を打たれた。

笞は、ほとんど一瞬の鋭い痛みだが。一本鞭は全体が肌をこすって、重たい痛みがコマ何秒間か続く。

身体の正面をたて続けに五発打たれて、鎖をつかんでいた悠莉愛の手から力が抜けた。全体重が、手首にかかって鉄枷が骨にまで痛みを与えた。

勇介が背後にまわったとき、悠莉愛はかすかに安堵の息を漏らした。背中でも尻でも、腹部を打たれるよりは痛みが少ない。

しかし、もちろん。勇介はそんな甘っちょろいことはしなかった。

シュウウン、ピシッ！

床すれすれに走った鞭は悠莉愛の脚の間で

鎌首をもたげて、X字の交点を打ち据えたのだ。

「むぶっ……！」

悠莉愛のくぐもった悲鳴は長く続かなかった。がっくりと頭を垂れて、打ち据えられた箇所からちょろちょろと水が流れ出て太腿につたつた。

「一発で落ちたか。仕込甲斐があるな」

「先輩、僕が始末しましょうか？」

和臣がホースを引っ張ってきた。ノズルを近づけて、悠莉愛の股間を洗う。

和風の土蔵で、床も一見すると板張りだが、耐水性の床材を使っている。水はわずかな傾斜に沿って奥の排水口へ吸い込まれていった。

「さて、おまえの番だな」

後ろ手に柱を抱かされている尋海の前に勇介が立った。

「え……？」

「姉だけを痛い目に遭わせては不公平というものだ」

「で、でも……ぼく、逆らったりしてません」

「そうだな。おまえは素直だから、最初の調教は必要ないし、今のところ懲罰も必要ない。

しかし……」

勇介のいかつい顔に、酷薄な微笑が浮かんだ。

「僕は女を虐めて泣かすのが趣味だ。おまえも、僕の趣味につきあえ」

「でも、ぼくは男です」

「こんなちよろっこい物で、男と言えるか」

勇介は、まだ手にしていた一本鞭の柄で、尋海のペニスを軽く叩いた。

「毛も生えとらんすべすべの肌だ。僕から見れば、弱々しい女とたいして変わらん」

尋海は怒った顔で勇介を見上げて、すぐに目を伏せた。顔を直視してはいけないと、思い出したのだった。

「それとも、姉よりもきつい鞭に耐えて、自分は男だと証明するか？」

尋海の返事を待たずに、勇介は壁掛から別の鞭を持ってきた。

「これが、重罪への懲罰に使うワイヤー鞭だ」

文字通りに、それは長さ一メートルのワイヤーだった。太さは五ミリほど。先端には小さな金属球がかぶせてあるから、肌を切り裂く恐れはない。その代わり、打撃の威力は増

している。

「これで五発だ。悲鳴をあげずに気絶もしな
かったら、男と認めてやろう」

尋海の顔が蒼白になった。どれほどの痛さ
か想像もつかない。

和臣がいったん手錠をはずして、尋海を後
ろ向きにした。

ほんのすこしだけ、尋海に生気が戻った。
尻や背中なら、もしかすると耐えられるので
はないか。

「いくぞ！」

ぶゆん、バチイン！

「うっ……」

尋海は、ぎりっと歯を噛みしめて悲鳴を呑
み込んだ。尻の肉が爆ぜるような、熱く鋭い
激痛だった。

ぶゆん、バッチイン！

ぶゆん、バッチイン！

二発続けて打たれて、尋海は吐き出した息
を吸うことすらできなかった。それでも耐え
た。五発だけ我慢すれば赦してもらえると、
単純に信じている

ぶゆん、パアンン！

鞭はそれまでとは角度を変えて下から上に奔った。尋海が抱いている柱に当たって、鞭先はそのまま跳ね上がる。

「きゃああっ……！！」

まだ声変わりの始まっていない、甲高い悲鳴が土蔵に響き渡った。

「痛い、痛い……」

尋海は柱を抱いたまま、ずるずるとうずくまり、悶絶してしまった。

「尋海っ……！？」

失神から醒めた悠莉愛が、思わず弟の名を呼んだ。睾丸を叩かれる痛みは、悠莉愛には想像もつかない。けれど、女が股間を鞭打たれるよりも痛いのだとすると——自分の場合と引き比べて、また気が遠くなりかけた。

「活を入れてやれ」

和臣はまず、手錠を掛けられたままの尋海の腰を手刀で何度か強く叩いた。縮みあがっていた陰囊が垂れ下がったのが、悠莉愛にも見えた。それを、揉みほぐしてから和臣が手錠をはずす。

尋海の上体を起こして両手で胸を押さえ、背中に膝頭を当てて、ぐいっと押す。

ふうっと大きく息を吐いて、尋海が目を開けた。

「あれ……？」

不思議そうにあたりを見回した。

「あ……」

下腹部に手を当てて顔をしかめた。

「これで決まったな。おまえも姉と同じように扱ってやる」

勇介の宣告に、もう尋海は逆らわなかった。

和臣が縄を持って近づくのを見て、尋海が怯えた表情になった。

「そう、びくつくな。いつまでも素っ裸は羞ずかしいだろう。チ●ポくらいは隠してやる」

促されて、おどおどと立ち上がる尋海。その腰に、和臣が縄を二重にして巻きつけた。藁で編まれた毛羽立った縄——荒縄だった。

前で結んで両端を鼠蹊部にくぐらせ、引き絞ってから後ろで結び留める。尋海の男性器は縄でくびり出される格好になった。

和臣は縄を一本ずつに分けて左右から前へ回し、鼠蹊部を通る縦縄に絡ませて折り返した。そうやって縦縄を左右に広げておいて、左右一本ずつ残っている縄尻も前へ回す。今

度は、左から回した縄を右の縦縄に絡め、右から回した縄は左の縦縄にくぐらせた。

その手順を何度も繰り返すと、尋海の股間は荒縄の網目に包まれた形になった。

「痛い……チクチクする」

しかし、やめてくれとは言わない。言えば罰を受けると、すでに学習している。

「これから当分は、この格好で過ごせ」

「当分って……学校へ行くときもですか？」

「学校へ通うのは、来年の四月になってからだ。それまでには、考えておいてやる」

勇介が口をはさんだ。

「え……あの？」

「転校生はイジメに遭いやすいというからな。進級後のほうが無難だ」

学校でのイジメよりひどい仕打ちをしてのけた張本人が、いけしゃあしゃあと言う。

「ああ……」

小さく嘆いたのは悠莉愛だった。虐待が続くとしても、体育の着替えで気づかれなくらいにとどまるだろうと思っていた。

実際、悠莉愛の鞭痕は（ぎりぎり）ショーツとブラで隠せる範囲に集まっている。

しかし、そんな勝手な予想は甘かった。すくなくとも四か月間は、身体に（顔にさえ）傷痕が残る虐待を受けるかもしれないのだ。

「さて、つぎはおまえの番だ」

悠莉愛も X 字形の宙吊りから解放された。

「もう一度だけ答えるチャンスをやるが——おまえは処女か？」

嗤いを含んだ声で、勇介が訊ねる。

「……いいえ」

沈黙を続ける勇気は、もはやなかった。それに。さっきのフェラチオは、経験があると自白したも同然だった。

「いつ、どこで？ これまでの経験人数は？」

「この夏。友達と海へ行って。一人だけです、ほんとうです」

「ふん、セコハンか。アナルはどうだ？」

「……………まだです」

一瞬、悠莉愛は質問の意味が理解できなかった。が、AV や ネット動画の氾濫している世の中で、いかに清楚な少女といえど、アナル S E X の知識くらいはある。あとに続いた十秒ほどの沈黙は、質問の裏側に隠された意味に怯えたからだった。

果たして、勇介は悠莉愛が恐れたとおりの言葉を吐いた。

「ふむ。それでは、儂も初物にありつけるわけだ」

勇介は和臣と同じように荒縄を手にして二重に折って、それを悠莉愛の腰に巻きつけた。前で結んで、結び目を恥丘のあたりまで引き下げた。そして、すこしはなした位置に大きな結び瘤を作った――のを、悠莉愛は見えない。唇を噛んで宙を見つめている。

しかし。太腿をこじ開けられ縄尻を通されて引き絞られると。

「厭っ……」

反射的に腰を引いた。

その突き出された尻を、勇介が平手で強く叩いた。

「動くな。『いや』は禁句だと、もう忘れたのか？」

「……………」

勇介が片手で小淫唇まで割り開いて、結び玉を埋め込んだ。

「くう……痛い」

勇介は、さらに縄を引き絞ることで、悠莉

愛の訴えを封じた。

縄は後ろで腰縄に結び留められてから折り返し、尋海と同じように左右に分かれて鼠蹊部を挟んだ。

尋海の縄褌が曲がりなりに男性器を隠しているのに対して、悠莉愛は女性器を強調して露出させられた。

悠莉愛も弟と同じ首輪を嵌められて、二人とも太い鎖をつながれた。着物を着付けている勇介を残して、姉弟は外へ引き出された。

「そのプレハブ小屋に、庭掃除の道具が入れてある。裏庭の掃除は、尋海の仕事になる」

尋海は返事をしなかったが、和臣はとがめなかった。姉弟を屋敷へ引き入れて、それぞれの部屋を案内してまわった。

台所を出て左がトイレ、右がバス。

「このトイレは、マホもおまえたちも使用禁止だ。排泄場所は、あとでマホが教える」

バス・トイレに続いて、客間が四つ。そのひとつが和臣の居室になっている。屋敷を貫く廊下を進むと、左側が勇介の居室と洋風のリビング兼ダイニングルーム。四つ座敷（ひとつは仏間）になっている。

「おまえたちの部屋は二階にある」

廊下を引き返して、急傾斜の階段を上がった。一段ずつが五十センチほどもある。

そこに足を乗せて、悠莉愛は股間の痛みに息を詰まらせた。これはただの階段ではなく、SMの大道具だった。

「立ち止まるな」

先に立つ和臣が、二本の鎖を引いた。

「く……」

悠莉愛はしぶしぶ階段を登りはじめた。ひと足ごとに結び瘤が股間をえぐり、荒縄の毛羽が粘膜をこすりあげる。目から小さな火花が飛び散るほどの鋭い痛みだった。

後ろに続く尋海のほうは、それほどでもないらしい。階段を踏む足音に乱れない。

階段を上がってすぐは、物置になっている。その奥が真帆の部屋。いちばん奥が姉弟に与えられた部屋——あるいは牢獄だった。

部屋の中は殺伐としていた。壁の両側には背中合わせで机と椅子。本棚も抽斗もなく電気スタンドだけが乗っている武骨な机と、座り心地の悪そうな木製の椅子だった。

部屋の奥には大きな木製のベッドが並んで

いる。スノコが剥き出しになっていて、毛布一枚すら掛かっていなかった。

床には二人の手荷物が投げ出されてあった。先に送ったはずの段ボール箱は、どこにも見当らない。

「六時になったら呼びに来る。それまで、おとなしく待っている」

壁に掛けられた時計は四時を指している。

和臣が出て行って、ドアが閉まると同時にガチャリと鍵の掛かる音。

悠莉愛はドアノブをつかんでみたが、びくとも動かなかった。外からしか開閉できないドア。まさしく牢獄だった。

悠莉愛はゆっくりと動いて、椅子の向きを変えてから腰を下ろした。わずかに股縄が緩んで、ほうっと息を吐いた。

「ねえ……ぼくたち、どうなるんだろ？」

尋海も姉と向かい合って座り、心細げに訊ねる。

「逃げ出すチャンスは、あるかもしれないけれど……」

悠莉愛は、ずっと考えていたことを口にした。

「たとえば、あの人のことを訴えもせずに……
そうね、神待ち暮らしをすることとしても……あ
いつ、母さんを見捨てるかもしれない」

それでもいいの——と、弟に訊ね返した。
「ええっ……？ やだよ。でも、こんなこと
されるのも厭だし……」

神待ち。ネットの掲示板で、一夜の寝場所
と食事を恵んでくれる神様を求める。善意か
ら無償で応じてくれる気高い人物も皆無では
ないが——つまりは、手っ取り早くて安っぽい
援助交際だ。

伯父から性的虐待を受けるのと、不特定多
数の人物に抱かれるのと、どっちがましなの
だろうと——悠莉愛は疑問に思う。

それとも、きっぱりと母を諦めて、警察に
保護を求めるべきか。

決心がつかない——と、悠莉愛は自分では
思っていた。

その頃、階下では。

「あっさりと切り上げてしまいましたね」

短めの丹前というか長めの半纏のような着
物を廻しの上に羽織った和臣が言った。

場所は、勇介の居室。十二帖のフローリングで、パソコンや複合機と、古ぼけた書籍を積み重ねた和風の本棚とが同居している。寝室は、廊下から直接は出入りできない隣の部屋だ。

「鉄は熱いうちに打てというのが、先輩の方針だと思っていました」

「そのとおり。だが、ちょっと遣り口を変えることにした」

「とは……？」

すぐには答えず、勇介は煙草に火を点けた。

「尋海は、マゾの素質じゅうぶんだ」

考えながら、勇介が言う。

「悠莉愛のほうは、あれは手ごわい」

「そうですね。ずっと先輩をにらみつけていました」

「そのくせ、従順になった振りをする。もっと反抗心を表に出す女なら、へし折れるまで痛めつけてやれば、本心から屈服するのだが」

「柳に雪折れ無し——そんなことをおっしゃってましたね」

「ふむ……二兎を追う者は一兎をも得ず、だ」

「つまり、尋海を先に墮とすということです」

ね？」

「頼むぞ」

「え？ やっぱり僕ですか？」

「そりゃ、そうだ。男の子はきみの専門じゃないか。それに、俺だと手加減が利きそうもない」

和臣への配慮か、勇介は一人称を変えている。

「憎いあいつの種だと思えば、どうもな。まあ……最終的には、人生を破綻させてやるが、せつかくの玩具を早々と壊すこともあるまい」

「そして、姉の方は先輩の流儀で可愛がってやりますか？」

「ふふん」

「先輩に虐められるのと可愛がられるのと、どっちが幸せか、僕にはなんとも言えませんがね」

「だから、悦んで俺の甚振りを受け容れるように調教するのが、きみの役目だろうが」

勇介は盛大に煙を噴き上げてから、煙草を消した。

2. 筆下ろしと初アナル

予告された時刻の一時間前に部屋のドアが開いて、裸エプロン姿の真帆が部屋へはいつてきた。

「そこに座りなさい」

支配者然とした口調で床を指さす。悠莉愛は黙って椅子から降りて床に正座した。尋海も見習う。

「ちょっとだけ、初歩的なお作法の勉強ね」

尋海の机に腰掛けて、椅子の背もたれに片足を乗せた。高い位置で立膝を突いた形になって、姉弟からは股間まで覗き込めた。

悠莉愛はさり気なくうつむき、尋海の目はその一点に釘付けになる。

「ふふん。これもマゾ牝奴隷の嗜みなのよ」

真帆はエプロンの裾をまくって、無毛の股間を尋海に見せつけた。

「ヒロは合格だけど、ユリは駄目ね。まあ、いいわ。先にお作法ね」

命令には絶対服従、『いや』も『やめて』も禁句なのは、すでに仕込まれている。

懲罰であれ躰けであれ気紛れであれ、責めを受ける前には『お願いします』、終われば『ありがとうございます』。SMプレイならありふれた決まり事だろうが、日常生活の場に持ち込まれるとなると――悠莉愛の感覚では、馬鹿らしさが先に立った。

挨拶は、基本が土下座。許しが出るまでその姿勢を保つ。どんな悪戯をされても（なにをされるか、わかりきっている）、動いてはいけない。

真帆が強調したのは、人称だった。

勇介は伯父様と呼ぶこと。さっきみたいに『あなた』などと呼びかけようものなら厳罰だと、真帆は威した。

真帆に対しては『お姉様』、和臣には『お兄様』。そして、悠莉愛はこれからユリと呼ばれることになる。尋海はヒロ。

「あたしだって二文字なんだから、あたし以下のおまえたちが三文字なんて、生意気よ」

一人称は、できればヒロとユリを使うこと。ただし、これは勇介の命令ではない。

そう聞かされた瞬間、悠莉愛は絶対に『わたし』で押し通す決心をした。

「あたしも、ルールを丸暗記してるわけじゃないわよ。基本が出来ていれば、その場にふさわしい態度を取れるのよ」

要するに、自分を徹底的に貶めて、勇介を崇める気持ちになればいいのだと、真帆はこともなげに言う。

「もちろん、和臣様はナンバーツウで、あたしがスリーだからね。わかった？」

「はい、わかりました——お姉様」

素直な言葉とは真反対の仏頂面で悠莉愛が答えた。

「はい、お姉様」

尋海は、姉よりは心のこもった返事をした。彼にしてみれば、あまりに非現実すぎて、ゲーム世界に迷い込んだ気分がしているのだった。

「さて、それじゃユリの身だしなみね」

真帆は悠莉愛を立ち上がらせた。エプロンのポケットからカッターナイフを取り出して、悠莉愛の縄褌を切り取った。

「あたしと同じように、つるつるになってもらうけど——あたしがしてあげようか？ それとも、御主人様の手をわずらわせる？」

「どっちも……羞ずかしいです」

厭と言いかけて、あわてて言いなおした。

「どうしてもしなければいけないのなら……自分でします」

下の毛を失うなんて、全裸よりも屈辱だ。けれど拒めば、さっきの何倍もの鞭だろう。

「そう？ 無駄毛が残ってたら、一本につき鞭一発よ。アヌスのまわりまで、綺麗にする自信はあるの？」

悠莉愛は、真帆の立場を考えてみた。猥婦だなんて呼ばれているし、鞭打ちも受けている。ナンバーズリーだなんて威張っても、自分たちとほとんど変わらない。この人まで敵にまわすのは得策ではない。

「真帆……お姉様におまかせします」

伯父に剃られるよりは、まだしもだった。

「ふうん。ほんとは、土下座してお願いされたかったんだけどな」

真帆はいったん部屋の外へ出て、すぐに洗面器とシェービング用品を持って戻ってきた。

「尋海、外に出ている」

「だ一め。ちゃんと見学するの。それから、ユリ。こいつのこと、なんて言った？」

きちんと正座している尋海の下腹部を足でつついてから。

「座り方も教えなきゃ駄目のようね。そんなに脚をそろえないの。三十度くらいは開いていなさい」

尋海は、すぐに従った。

「そうそ。そうやってれば……こんなことだって、してもらえるのよ」

真帆は、荒縄の網に包まれた股間を足の裏でこねくった。

「あ……チクチクして、痛いです。それに羞ずかしいです」

「気持ち良くないの？ やめてほしい？」

「……お姉様におまかせします」

尋海は姉の言葉を、そのまま真似た。痛いのは事実だが、肉体的な快感もあった。羞ずかしいのも事実だが、Hなことをされているという妖しい気分にもなっている。

『やめて』は禁句だけど『もっとしてください』は、言ってもいいのよ？」

「……………」

尋海は黙ってうつむいている。縄の網目が盛り上がっているのが、本心を露呈していた。

「あんまり遊んでる時間もないことだし」

真帆は悠莉愛をベッドに仰臥させた。位置を細かく指示して、スノコの間隙間に股間が来るようにさせた。

悠莉愛は脚を開いて両手はスノコの上。まさしく俎板の鯉だった。

「こうして眺めると、たしかにもじゃもじゃね。修学旅行のときなんか、からかわれたんじゃないの？」

「……今みたいじゃなかったです」

秋口からこっち、目立って濃くなってきた。SEXで女性ホルモンの分泌が促進されたのかもしれない。そのわりには、バストがあまり性長しないのが不満だが。

真帆がシェービングフォームを塗りたいくって、悠莉愛の股間をまっ白にした。

「動くと危ないよ」

ベッドの脇に片膝をついて、床屋で使っているような長い直刃の剃刀で剃り始めた。

音も立てずに、広い面積が一気に剃られる。あっという間に、恥丘から大淫唇のまわりまで肌が剥き出しになった。

脚を折って悠莉愛に膝を抱えさせる。大淫

唇を引っ張ったり押し下げたり、あるいはクリトリスを押さえて、毛根まで掘り出すように丹念に剃っていく。

「ん……」

肛門に触れられたときだけ、悠莉愛は息を漏らした。

剃り終わると、真帆は切り取った荒縄で大雑把に股間を拭った。

「つぎは排泄よ。ヒロも立ちなさい」

尋海の縄禪も切り取る。

圧迫が消えると、幼いペニスはそっくり返って、下腹部に密着した。

「サイズはともかく、硬さと角度は合格ね」

真帆は首環の鎖を持って、ふたりを階下に追い立てた。

段差が大きく急傾斜の階段でも、縄禪がなければどうということもない。

裏口から出て、屋敷の横をまわってガレージの前に来た。真帆を含めて三人は、玄関や表門から出入りしてはいけないのだと、歩きながら真帆が説明した。

ガレージの前だけはコンクリートが打たれて、洗車場になっている。排水溝が切られて、

隅には水道柱も設けられている。

「そこに並んで四つん這いになるのよ」

先端に細長いノズルの付いたホースを手にして、真帆が姉弟の後ろに立った。

ふたりは、冷水を浴びせられるくらいにしか思っていない。

「きゃ……」

肛門に冷たい感触を押し付けられて、悠莉愛が小さな悲鳴をあげた。

「じっとしてなさい。お腹の中をきれいにしてあげるんだから」

ようやく、悠莉愛は真帆の意図を理解した。

「そんなこと……してくれなくて、いいです」

「だ一め。御本尊様をウンチで汚したりしたら、極刑よ。一週間は寝込むくらい、厳しい罰を受けるのよ。それでも、いいよ？」

「……………」

後半の脅しは、考えるまでもなく理解できる。受け容れられはしないけれど。でも、御本尊様って……？

「あっ……！」

伯父の言っていた『初物』と考え合せて、アナルSEXという単語が頭に閃いた。

それを拒めば、抵抗すれば——また鞭で屈服させられる。それとも、男二人がかりで力づくでレイプされるか。そんな目に遭わされて、そのうえ極刑だなんて、あまりにひどい。

「……お腹を洗ってください」

まるきり意思に反した言葉を、悠莉愛は喉の奥から絞り出した。四つん這いのまま、全身の筋肉をこわばらせる。

「素直になったわね。ご褒美をあげちゃう」

真帆はノズルを悠莉愛の肛門に押し当てて、ぐりぐり抉りながら強引に押し込んだ。

「痛い……やめ……やめてほしいと思います」

選んだ言葉は、しかし無視される。

「御本尊様は、これの三倍は太いわよ。すこしは拡張しといたげる。ほら、もっと力を抜いて」

細いとはいえ、まったく潤滑されていないノズルを強引に挿入されて、悠莉愛は焼けつくような重い痛みを感じた。破瓜の鋭い痛みと違って、直接に内臓を圧迫される不快感も伴っていた。

ぐりゅりゅりゅ……腸の中に冷水が注ぎ込まれ始めた。奔流が腹の中を駆け巡る感覚は、

すぐに、腹部の膨満感にとって代わられた。

「ううう……」

頭を垂れて自分の腹を見ると、妊婦のように膨れていた。

ノズルを引き抜かれると同時に、猛烈な便意に襲われた。

「あの……おトイレに行かせてほしいです」

「お姉ちゃんでしょ。弟が終わるまで待ってなさい」

「え……？」

「男の子にも、同じ穴があるでしょ。今夜は姉弟並んで貫通式よ」

「そんな……」

悠莉愛は絶句した。凌辱されるのは自分だけだと思い込んでいた。けれど、たしかに、真帆の言葉は物理的には間違っていない。

「尋海にまで、変なことをしないでください。まだ子供じゃないですか」

「子供がいいって変態さんは珍しくないわよ。入学前に除膜式も貫通式も済ませたって子も……まあ、あたしが知ってるのはさすがに一人だけだけどね」

それは彼女自身のことではないのかと、悠

莉愛は疑った。しかし、そんなことを詮索している場合ではない。

「どうする？ もっとおしゃべりしていただきたいのかな？」

真帆がノズルを意味ありげに揺らした。

悠莉愛の便意は、切迫している。息を詰めるようにして括約筋を引き締めているが、決壊寸前だった。それは表情にも表われていた。

「姉さん、撲もう子供じゃない。平気だよ」

尋海が四つん這いの姿勢から肘を曲げて、真帆に向かって土下座した。

「どうか、ぼくにも姉さんと同じことをしてください」

そのままじっとしている。尋海は勇介と真帆から言われたことをきっちり覚えて遵守していた。

「ふふん、素直ね。素直で従順でHな子は、大好きよ」

姉とは違って、奴隷とか調教といった言葉に幾分かの興味を示しているのを、真帆にも見抜かれている。しかし、実践となると。

「い、痛い……！」

姉よりも大きくて甲高い悲鳴をあげた。

「お腹が……気持ち悪い」

尋海の腹も、みるみる膨れていった。

「ふたりとも、出していいわよ」

悠莉愛は立ち上がって、屋敷へ戻ろうとした。

「どこへ行くの？ おまえたちの排泄場所は、ここよ」

真帆が指差したのは、コンクリート床に切られた排水溝だった。

「あの……ここで、ですか？」

激痛ともいえる便意でろくに口も利けなくなっている姉に替わって、尋海が訊ねる。

「そうよ」

「お姉様は……ここで見てるんですよね」

「お姉様は、ユリとヒロの醜い排泄姿をご覧になられるのですか——はい、言い直し」

さすがに悔しそうな表情で、しかし尋海は教えられた言葉を口にした。

「そうよ。奴隷は御主人様に隠し事をしてはいけないの。もちろん、和臣様やあたしにも」

「……わかりました」

尋海は、素直に排水溝を跨いで、わざわざ真帆に正面を向けてしゃがんだ。

ぶしゃああっ……

しゃがむと同時に、尋海は勢いよく前と後ろから水流をほとばしらせた。太い奔流は最初は透明な水だったが、小さな塊りが幾つか排水溝に転がって、そこからは茶色く色づいた水になった。

数秒で水流はせせらぎに変わり、ビチビチと音を立てながら間欠的に水滴が続く。

「ユリ、おまえもさっさと出しなさい」

限界をとっくに越えた排泄への欲求と羞恥と、そして真帆への反感との板挟みになっていた悠莉愛だが、生理的欲求を克服することは不可能だった。真帆に背を向けてしゃがむと、即座に括約筋を緩めた。

尋海に負けない派手な音を立てて、放水が始まった。逡巡していた数分のうちに便が水に溶け込んでいて、最初から濃い茶色のしぶきがコンクリート床に飛び散った。とうぜん、悠莉愛の下半身どころか背中や乳房までもが茶色に汚れた。

排泄の快感に虚脱が重なる。しかし、それで屈辱が終わったのではない。

「もう一度、洗うわよ。はい、二人とも四つ

ん這いになりなさい」

もう一度どころか。水が完全に透明になるまで、何度でも繰り返すと真帆が宣告した。

前よりもたっぷりと注水されて、今度は悠莉愛も無駄な抵抗はせずに、すぐ排泄した。さらに繰り返されて、それでようやく水浣腸は終わった。

姉弟は並んで立たされて、自身の糞便でまだらに汚れた全身をホースの水で洗い流された。十一月の戸外で冷水を浴びせられて、歯をカチカチ鳴らして寒さに震える。

真冬になっても、こんなことをされるのだろうか。悠莉愛はその情景を頭に描いて、いっそうの寒さを覚えた。

それは、つまり――すぐにでも逃げようという考えを、すくなくとも心の底では捨てているということなのだが、悠莉愛の意識は、それに気づいていない。

真帆が側面のドアからガレージに入って、洗いざらしのバスタオルを持ってきた。

「それで身体を拭きなさい。あたしは、そのあいだに……」

真帆は立ったまま排水溝を跨ぐと、裸エプ

ロンの前を左手で持ち上げ、右手は股間に添えて指をV字形に開いた。

ぷしゃああ……

一本の細い水流が排水溝に向かって弧を描いた。

「ご主人様にいただいた御仕着せを汚したら大変だからね」

小水だけなら、しゃがんでいてもそんなに飛び散りはしないし、それでも心配ならエプロンを脱げばいい。どういうつもりかは知らないが、わざと自分たちに見せつけているのではないかと、悠莉愛は疑った。それとも、自分にも強要する前振りだろうか。

裏口から屋敷へ戻った姉弟は二階の監禁部屋ではなく、浴室へ連れて行かれた。

屋敷の大きさに比例して、浴室も馬鹿広かった。脱衣所だけで八畳くらいはある。

その床に、真帆は姉弟を開脚正座させた。

「ご主人様と和臣様がいらっしゃるまで、全裸待機ね」

くくっと笑って、真帆が姿を消した。

一分ほどで、勇介と和臣が脱衣所に姿を現わした。勇介は最初と同じ和装。和臣も変わ

らず廻し一本だった。

太腿の付け根で重ねている悠莉愛の両手を、勇介が蹴り飛ばした。

「手は、常に後ろで組んでおけ。いや、それではマホと変わらん。おまえたちは、後ろで反対側の肘をつかんでおれ」

悠莉愛は黙って言われたとおりにした。無理な姿勢なので肩がすこし痛い。

尋海はあれこれ身体をくねらせて、やっと自分の肘をつかんだ。

「ヒロは身体が硬いな」

和臣が爪先で尋海の股間をつついて、そこも硬くさせた。

「いずれ、股割りでも仕込んでやるか」

二人はさっさと衣服を脱いで、姉弟を浴室へ追い立てた。

「うわあ……！」

屋敷を見たときと同じ嘆声を尋海があげた。

それも無理はなかった。脱衣所の広さから想像していたよりも、はるかに広く豪華だった。浴槽は幅が五メートルほどで奥行も三メートルくらい。洗い場とシャワースペースと、プラスチックの椅子が並べられた休息スパー

ス。全体では、2DKくらいの広さがありそうだった。

勇介と和臣は姉弟を立たせたまま、さっさと湯に浸かる。

「本来なら、おまえたちはそこで正座だが、今日は甘やかしてやる。一緒にはいれ」

「はい……」

気の重い返事をして悠莉愛は、すでにぐしゃぐしゃになっているリボンをほどき、ポニーテールをお団子に結った。それから、浴槽に近寄って横向きにしゃがむ。冷水で身体を洗った直後だが、意識して掛け湯を使った。

悠莉愛は浴槽の端から湯に浸かろうとした。

「遠慮するな。こっちへ来い」

浴槽のまん中で奥の壁にもたれている勇介が手招きする。

悠莉愛は、それにも素直に従った。この一瞬だけ拒んでも無意味だった。

真帆に剃られた下腹部と淫唇とを無防備に晒して、それでもできるだけ素早く浴槽の縁を跨ぎ越えた。

湯に浸かって、そのまま固まっていると。

「ここへ来い。伯父と姪でスキンシップだ」

悠莉愛の若い身体を弄ぶと、堂々と宣告する勇介。こういうときだけ血の關係を持ち出して禁忌感を煽っている。

「ヒロは、こっちだ」

和臣が尋海に声をかける。

悠莉愛は厭々、尋海はおっかなびっくりで、呼ばれた相手に近づいた。

「きゃ……！」

悠莉愛は、いきなり乳房をつかんで引き寄せられ、勇介の腰に乗せられた。太腿を左右に割り開かれて、勇介の脚を跨ぐ形にされた。

「そう言えば、まだおまえには訊いていなかったな。当然、オナニーはしているな？」

左腕で胸を搔い込んで乳房を弄び、右手は股間をまさぐりながら、勇介が決めつける。

さすがに、悠莉愛はしばらく口をつぐんでいた。単純に羞ずかしかったからではない。どう答えれば虐められないですむか、考えをめぐらせた。

否定してシラを切り通すのは難しい。ほとんどの女の子がオナニーをしているというのは、もはや常識になっている。それに、おそらく——この男は、「はい」と答えるまで自分

を拷問にかけるのではないかしら。

でも、正直に答えたら——どんなふうにするのか説明させられたり、もしかすると実演まで強要されるかもしれない。

と、そこまでの覚悟を固めてから、悠莉愛は答えた。

「……はい」

「ふん。これからはオナニー禁止だ。どうしても我慢できなかつたら、僕の許しを受けて、僕の目の前でやれ。それとも、僕が可愛がってやってもいいぞ」

「我慢します」

答えてから。なんだか自分がオナニーをしたがっているような言い方だったと、失敗に気づいた。

「我慢するな。今日は甘やかしてやる」

勇介の指がクリトリスを探り当てた。

「一人しか男を知らんのなら、まだクリトリス派か。それとも、もう膣逝きを覚えたのか？」

「く……」

言葉で答えなくても。

親指の腹でクリトリスを刺激されるたびに、悠莉愛の背中がぴくんと震える。中指を膣に

挿れられても、反応は乏しい。

「遊んでいる場合ではないな」

「ひゃ……」

勇介の左手に尻たぶを割られて、悠莉愛は小さな悲鳴をあげた。

肛門のまわりを指で強く揉まれた。

「柔らかくしとかんと、後がつらいぞ」

「痛い、です……」

尋海も同じようにされているのだろう。遠慮がちな声で和臣に訴えている。

勇介の指が位置を変えた。右の親指で膣を穿たれ、中指が肛門に侵入してくる。

「くう……ん」

ほとんど痛みはなかった。どころか。左手でクリトリスをくじられて、肛門を蹴られる不快感に鋭い快感が重なる。そして、恥辱と屈辱と——こんな状況で快感を覚えてしまう自分への嫌悪。湯にのぼせたように、頭がくらくらしてきた。

「これくらいこなれば、もう良かろう」

その言葉を聞いて、和臣が立ち上がった。浴槽から出て、壁の隅に立てかけてあったエアマットを洗い場に延べた。ひとつは使い込

んで色褪せて、もうひとつはまっさらだった。

その新しいほうのエアマットに、悠莉愛は仰臥させられた。そして尋海は、古いエアマットの上で四つん這い。

気を変えて前を犯すつもりなのかと、悠莉愛は訝った。それでもかまわない。そのほうがまだとも思う。抵抗しても力づくで犯されるか、また土蔵に連れ戻されて拷問されるか。この男がしたいように身体を弄ばれるしか、自分にも弟にも選択肢はないのだと、悠莉愛は諦めている。

悠莉愛は膝の裏をつかまれて、身体を二つ折りにされた。肛門がさらけ出される。

ぴちゃ……

生ぬるい感触に、思わず悠莉愛は自分の下腹部に目をやった。ゆるいスライム状の液体が肛門に塗り込められているところだった。

(ああ……)

たいていの子は、処女のうちからローションくらい知っている。

不必要な苦痛までは与えないよう配慮してくれていると知って、ほんのちょっぴり伯父に感謝しかけて、あわててその思いを打ち消

した。姪を奴隷にしたりアナルSEXをしたりすること自体が、残虐非道なのだ。

横を見ると、尋海も同じようにローションを塗られているところだった。

「よそ見をするな。特に許してやるから、僕の顔を見つめておれ」

奴隷は主人の顔を直視するなという作法は、こういう場合は例外らしい。

悠莉愛は顔を正面に向けた。残虐と好色とを貼り付けた野球ベースが目の前にあった。悠莉愛はその顔を透かして天井に焦点を合わせた。

熱くて硬いものを、予告も無しに肛門に押し当てられた。

ぐううっと肛門を腹の奥に押し込まれるような鈍い痛みと圧倒的な不快感。それがだんだん大きくなって――ずぶっと一気に貫かれた。

「あっ……」

思わず声を出したが、破瓜の鋭い痛みに比べると、ずっと軽かった。痛いというよりは灼熱感があった。

ずっぷずっぷずっぷと、勇介が腰を使い始

めた。

内臓を腹の奥まで押し込まれて、すぐに肛門をめくり返されるような違和感——なのだが、排泄のときに感じる心地良さが、わずかだがあった。それが悔しい。耐えられないほどの苦痛だったら、伯父への嫌悪と憎しみを募らせるのだが——これでは、禁断の行為にみずから加担しているような錯覚が生じる。

「い、痛い……痛い。厭だ、やめてよ」

苦痛を訴える尋海の声は、半分泣いている。

弟にはつらいかもしれないと、悠莉愛は思う。自分よりも体格が小さいし——ちらっとしか見てはいないが、和臣の怒張は勇介よりも大きい。

「痛いとか言いながら、おっ勃ててるじゃないか。やっぱりドMだな」

「違うよ……」

巧妙に前立腺を刺激しているせいなのだが、そこまでの知識は悠莉愛にない。言葉を繰り返されるうちに、もしかするとほんとうに弟にはマゾっ気があるのかと思えてくる。

「もっと気持ち良くしてやるぞ」

和臣の腰使いが、いちだんと激しくなった。

「うああ、痛い！ もう、ゆるして。身体が裂けちゃう！」

勇介は余裕たっぷりといった感じでリズムカルな抽挿を繰り返すだけで、自分を追い込んでいないことが、経験の乏しい悠莉愛にもわかった。

しかし。和臣が腰を引くと、勇介も抜去した。

「お掃除フェラってやつだ」

髪をつかんで尋海を引き起こし、その前に和臣が仁王立ちになった。尋海はなにを要求されているか理解して、萎えかけているペニスに口を咥えた。

「しゃぶるだけじゃないぞ。ストローみたいにして、残っている精液を吸い出せ」

「ということだ。今は、そこまでする必要はないがな」

勇介も悠莉愛に同じことを要求した。和臣と違って射精していないのだから、怒張はまったく萎えていない。

悠莉愛は膝立ちになって、真上からそれを咥えた。風呂で洗っているので、臭いは気にならない。けれど、気のせいかもしれないが、

えぐい味がして吐きそうになった。

「ふたりとも頑張ったな。褒美をやろう」

勇介が真帆を呼びつけた。

「ヒロに筆下ろしをさせてやれ」

「はい、喜んで」

居酒屋の店員みたいな台詞を吐いて、真帆は尋海をマットに押し倒した。

「え……なに？」

うろたえながら、成熟した女体を肌に押しつけられて、たちまちペニスが怒張する。前立腺を刺激されて無理矢理に勃起させられていたときよりもひと回りは大きい。

「伯父様、こんな淫らなこと——尋海に教えないでください」

「おまえは行きずりの男と、そういう淫らなことをしたのだぞ」

勇介は膝立ちの悠莉愛を簡単にマットに押し倒して、のしかかろうとした。

「厭です！ こんな馬鹿なこと、もうやめてください」

悠莉愛は伯父を押しつけようとしたが、八十キロちかいがっしりした体躯は、●六歳の非力な少女の手に負えなかった。まして、下

はぶよぶよしたエアマットだ。

「NGワードを連発したな」

ドスの利いた声で決めつけられて、悠莉愛はすくみあがった。

「今すぐ心を入れ替えるなら、今度だけは見逃してやってもいいぞ」

乳房に刻まれた鞭痕を指でえぐるようになぞられて、悠莉愛は抵抗をやめた。力づくで犯されて、さらに鞭打たれるなんて、間尺に合わない。

「うわ……ああっ！」

尋海の感極まった、悲鳴のような声。

勇介と悠莉愛がもみ合っているうちに、真帆は騎乗位で尋海を犯して、三こすり半どころか、一度腰を沈めただけで果てさせたのだった。

尋海は驚愕と快感に呆然自失している。

「男は出せばよかろうが、女はそうはいかない。褒美だから、たっぷり可愛がってやる」

身体全体で悠莉愛を組み敷いて、勇介は姪の股間をまさぐった。

「かわいそうに、こんなに縮こまって」

淫唇を割り広げてクリトリスをほじくり出

して、包皮ごと指で転がす。同時に、上下にも摩擦刺激を与える。

「あ、くうう……」

やめてとも厭だとも言えず、悠莉愛は言葉にならない声を漏らした。

初体験の相手に比べて、勇介の指の動きはねちっこくて、しかも格段に繊細だった。嫌悪感とは関係なく、鋭い快感が突起から腰の奥へとスパークした。

じわあっと膣の中に熱い滴りがにじむのが、はっきり自覚できた。

身体が勝手に男を受け挿れる準備を整えていく中で、心はますます閉ざされていく。

いっそう脚を大きく割り開かれて、悠莉愛は狼狽した。

「伯父様、ゴムを忘れています」

勇介が意外そうな顔をした——のは、演技だったかもしれない。

「あたりまえだ。コンドームなんか着けて、セックスといえるか」

「でも……」

「もしかすると、生挿入の経験はないのか？
では、処女膜が無いだけでこれも初物という

わけだ」

「困ります。赤ちゃんができたら、伯父様だって困るはずです」

妊娠したら堕ろせと言われるのだろうと思いつつ、それでも悠莉愛は食い下がった。しかし、勇介の返事は予想を超えて残酷なものだった。

「僕は困らん。男だろうと女だろうと、おまえやヒロと同じように扱うまでだ。母子で奴隷というのも、面白いな」

「そんな……いくら冗談でも、ひど過ぎます」

「冗談かどうか、十月十日経てばわかる」

勇介は左手でひとまとめに悠莉愛の太腿を抱えて、右手でペニスを握って狙いを定める。

「厭っ……お願いだから、やめて！ ゴムさえ着けてくれるんだったら、なにをされてもいいです！」

全裸を強制され緊縛され鞭打たれ剃毛され浣腸されアナルまで犯されて、これ以上の辱めなど思いつかなかったが、そう懇願するしかなかった。

意外なことに。勇介はあっさりと引き下がった。

「いいだろう。おまえの嘆願はルールにかなっている」

意味不明の言葉を吐いて、勇介は立ち上がった。

「和臣くん、ユリを折檻蔵へ連れて行け」

勇介が浴室から出て行き、悠莉愛も和臣に腕をつかまれて引っ張り出された。

勇介と和臣が身体を拭いて服を着るあいだ、悠莉愛と尋海は濡れた身体のまま全裸開脚正座。

「和臣くん、ユリを正装させて折檻蔵に連れて来てくれ。マホ、おまえはヒロだ」

真帆が取ってきた麻縄の束を手にして、和臣が悠莉愛の後ろに立った。

「手を後ろにまわせ」

膝で肩を押さえつけて手首を縛る。

「く……」

胸に縄を巻かれて、悠莉愛は呻いた。

和臣の縛り方は乱暴だった。やたらに縄を引き絞って、それでいてどこか緩みが残っている。

それに比べ勇介の縄は、ぴったりと肌に吸いつくような感じだ。必要な個所は厳しく締

めつけてわずかな緩みもないが、どことなくゆとりがあった。

生まれて初めて緊縛された悠莉愛にも、両者の違いは文字通り肌で感じ取れた。

「ヒロはお姉様が縛ってあげるね」

愉しそうに少年を縛る真帆。案外とサディスティクスの一面もあるのかもしれない。そして尋海は一年上の女性に縛られながら、射精したばかりのペニスを半勃ちにしている。

悠莉愛は縄尻を股間に通されて、尋海はペニスを陰囊ごと縛られて、土蔵に引き立てられた。

「これは絶対のルールではなくて、先輩の趣味なんだけどね」

和臣が説明する。土蔵で責めを受ける者は、必ず全裸で拘束されていなければならない。たとえ、すぐ別の形に拘束し直すとしても。

「大相撲でいきなり立ち合わずに、四股を踏んだり仕切ったりするようなものかな」

悠莉愛にしてみれば、不安を長引かせられるだけだった。

垂直に立てられた車輪のような物に、悠莉愛はX字形に磔けられた。タイヤに相当する

部分は太い木材で作られて、やはり木製のスポークが軸から放射状に伸びている。車輪の下半分は透明な箱の中にはいつている。

「ヒロはいい子にしてたから、特等席で見物させてやろう」

柱を背にして胡坐を組まされ、脛と脛を重ね合せて縛られた。さらに胸が脛にくっつくほど深く折られて、肩から腋にまわした縄で固定された。いわゆる海老責めの形だった。

身体を引き起こされて背中を柱に括りつけられると、剥き出しの股間を姉に向かって晒すことになる。

「では——なにをされてもいいという、そのナニをしてやろう」

車輪の脇に立てられたスタンドのスイッチを勇介が押した。

ザアアアッと音を立てて、梁に取り付けられているパイプから水が降り注いだ。

「ひゃあっ……」

冷水を頭から浴びせられて、悠莉愛が驚きの悲鳴をあげた。

冷水の幾らかは床に飛び散ったが、ほとんどは透明な箱——アクリル製の水槽に注ぎ込

まれる。

どんなひどいことをされるのかと怯えきっていた悠莉愛は、ほうっと安堵の息を吐いた。

勇介が第二のスイッチを押すと、車輪がゆっくり回り始めた。

「え……？ ひゃああ……ぶわっ！」

立て続けに悠莉愛が叫んだ。身体が傾いていくことに驚き、身体に直接冷水を浴びせられて冷たさに叫んで、最後には鼻から逆流した水に苦悶する。

二十秒ほどで悠莉愛の身体は一回転して、そのまま二回転目が始まる。

今度は逆さになっているあいだ息を止めていたので、苦しまずにすんだのだが。三回転目が始まって逆さになりかけて、水槽の底に溜まっている水が明らかに増えていることに気づいて、悠莉愛は戦慄した。

「伯父様……水を止めてください」

「今度の願いはルールにかなっておらんぞ」

脱衣所のとおりと同じようなことを勇介が言った。

「どうしても今の責めに耐えられないときは、もっとつらい別の責めを乞い願え。それが儂

の趣味にあっていれば、叶えてやらんこともない」

なにをされてもいいから生挿入を赦してほしいという願いは、そのルールにかなっていたのだと、勇介が言う。

「……………」

悠莉愛は言葉を失った。

「そんな絶望的な顔をしなくてもいいのよ」

真帆がにやにや笑いながら言い添える。彼女は縛られていないシエプロンを肌に着けている。勇介の流儀では、今の真帆は責めの対象ではないのだろう。

「顔が水に浸かるのは、せいぜい一回転のうちの半分までよ。息を止めてれば、半日だって平気よ。経験者が言うんだから、間違いないわ」

「半日どころか、一時間で音を上げるのはヒロのほうでしょうね」

和臣も言葉騁りの輪に加わった。

「海老責めは半日も放置すると、死ぬかもしれませんからね」

事実、すでに尋海の顔は風呂の水ではなく汗で濡れている。

「ふむ。罰を受けているほうが楽をしているのは不公平だな」

勇介がスタンドの中間に取り付けてあるボックスを開けて、いくつかのスイッチとダイヤルを操作した。

車輪の回転が三倍くらいに早くなった。

バチャ……バチャ……

顔が水に浸かって、つぎの瞬間には引き上げられる——のは、いつまでも続かなかった。

何回転目かに悠莉愛の身体が完全に逆さになったとき、そこで車輪が止まった。

びくっと悠莉愛の身体が震えて、水の中で左右を見回している。

十秒ほどで車輪は回り始めて、悠莉愛の顔が水面から出た。

「ぷはっ……」

息を吐き出した直後に、ずっと早い勢いで車輪が逆転して、また悠莉愛の顔を水に沈めた。

肺に空気がないのだから、すぐに苦しくなる。軀から逃れようと、悠莉愛が激しくもがく。しかし、手首と足首だけでなく肩も腿も腹部もぎっちり縛りつけられているのだから、

脱出など不可能だった。

三十秒ほどもして、ようやく車輪がゆっくりと回り始めた。

「げほっ……うええ」

悠莉愛は咳込んで水を吐いた。

「もう……赦してください」

息も絶え絶えに訴える。

「つまり、もっと厳しい責めを望むのか？」

「違います！ お願いですから……」

「生挿入して生中出しをしてほしいのか？」

「……………」

悠莉愛は絶句した。が、沈黙はそんなに長くは続かなかった。

「人でなし！」

悠莉愛が叫んだ。

「母さんを人質に取って、わたしたちを虐めて……」

そこで言葉が途切れたのは、顔が水に浸かる前に息を溜めたからだった。

車輪は止まらずに回り続ける。

「儂への侮辱は罪が重いと教えておいたぞ。これでは、今夜中には罪を償いきれんな」

勇介にうながされて、和臣が尋海の海老責

めを解きにかかった。

水槽の水は半分くらいまで溜まっている。そこで、勇介は水を止めた。

水車の正面にカメラのような器具を三脚で立てた。

「朝まで、そこでたっぷり反省している。明日の夜は別の懲罰を与えてやる」

悠莉愛を絶望のさらに下まで墜とし込んでから、勇介は背を向けた。そのまま土蔵の扉に向かう。

「あたしたちも引き上げるわよ」

真帆が、尋海の性器を縛っている縄をつかんで引っ張った。そのとき。

「お願いします。ぼくにも姉さんと同じ罰を与えてください。その代わりに、時間を半分にしてください」

勇介が立ち止まった。

「ふむ。ルールにはかなっているな。だが、行儀も言葉づかいも落第だ」

あっという顔になって、尋海が床に膝をついた。後ろ手に緊縛されたまま土下座しようとして前に倒れかかったが、真帆に髪をつかんで支えられた。

「ユリの罰を半分にして、それをヒロにください」

「馬鹿なことを言っちゃ駄目。姉さんは朝までだって平気だから」

勇介が引き返してきて、水車のスイッチを操作した。ざああああと、ふたたび水が落ち始める。

「満水になれば、マホが言ったように一回転のうち半分は水の中だ。実際に息ができるのは、せいぜい三分の一になる」

「……………」

尋海は水槽を凝視して絶句している。

「おまえに姉の罰を分かち与えるのは無しだ。しかし、姉を思うおまえの心に報いてやろう」

和臣がエアロバイクを水槽の横に据えた。

バイクはあちこちが改造されている。車輪にチェーンを掛けられるようになっているのも、そのひとつだった。小さな箱がエアロバイクの後端に取り付けられて、車輪とチェーンでつながれた。箱に二本のホースが接続されて、一本は端を水槽に沈められ、もう一本は土蔵の壁際まで伸ばされた。

和臣が手でペダルを回すと、水槽の水が吸

い出されて壁際の穴に流れた。

「姉を楽にしてやりたいなら、頑張っつて漕げ」

しかし尋海は、エアロバイクのサドルに目を吸い寄せられている。ペダルを回転させると、サドルから突き出ている二本の棒が上下に動く。棒というよりは、ディルドだった。

前側のディルドは直径が五センチほど。思いきりエラの張ったペニスを模しているだけでなく、胴部には金属製の鉤が植え付けられている。後ろのディルドはひとまわり小さいが、形状は同じだった。

女が漕げば、自分で自分の二つの穴を責めることになる。

和臣が前のディルドを抜き取って、細い心棒だけにした。そして、残っているほうのディルドにはローションを縫った。

「乗っていいぞ」

尋海はしばらく、水槽に流れ落ちる水とエアロバイクを見比べていた。やがて、こわばった表情でペダルに足を乗せた。が、突き出したディルドに妨げられて、サドルに尻を乗せられない。

「手伝ってやるよ」

和臣が両手で尋海の腰をかかえて持ち上げた。腰を前後左右にこねくってアヌスとディルドの位置を合わせると、ぐいと押し下げた。「うああああっ……痛い！」

ワイヤー鞭で叩かれたときよりも大きな甲高い悲鳴が、尋海の喉から迸った。

悶える尋海を気づかうことなく、和臣がサドルの高さを調節して、ペダルが下にあるときは尋海の膝が伸びきるようにした。

「痛いばかりではかわいそうだから、気持ち良くしてやろう」

萎えきったペニスを半勃ちになるまで指でしごいて、細長い筒に突っ込み、それを心棒に嵌め込んだ。

「漕いでみろ」

和臣に言われて、尋海はペダルを踏んだ。

「くうう……」

呻いて、足が止まる。

「あと十センチで満杯ね。たった十センチの違いが、実はすごく苦しいのよ」

尋海が顔をしかめながらペダルをゆっくりと漕ぎ始めた。

「そんなんじゃちっとも減らないわよ。水は

出しっぱなしなんだから」

尋海が懸命にペダルを漕ぐ。

「くうう……痛い……え？」

うろたえた声。それまでは同時に上下していたディルドとオナホルの動きが、だんだんずれてきたのだ。

「ずっと同じ動きでは退屈だろう。ペダル二十回転につき、前が二十二往復で後ろが二十一往復する」

つまり、前後の動きがずれるだけでなく脚の運動に対しても刺激がシンクロしない。

「そら、足が止まりかけているぞ。ユリを溺れさせたいのか？」

「ぐううう……」

歯を食いしばって全力で漕ぎ始める尋海。

サドルの位置が高くて尻の座りが不安定だから身体が揺れて、ますますアヌスをディルドにえぐられる。しかし、激しい苦痛を受けていながら、オナホールから出入りするペニスの根元は、最大まで勃起している。

オナホール側の取付金具に工夫がしてあるので、下側が尋海の腹部に当たるとそれ以上は下がらず、ペニスが抜けるほどは上に動か

ない。しかも心棒は往復運動に合わせて左右に回転している。金具のところでスリップするからオナホールが一回転するわけではないが、左右にこねくる動きになる。少年の敏感なペニスには過剰の刺激だった。

「姉思いのヒロに免じて、今回の懲罰は二十四時でおしまいにしてやる」

「あ、ありがとうございます」

苦しそうに息を吐きながら、尋海が感謝の言葉を口にした。

「ありがとうございます……伯父様」

悠莉愛も弟に倣った。自分ひとりなら強情を張り通したかもしれないが、弟まで巻き添えにはできない。

「ふむ。ようやく奴隷の礼儀をわきまえてきたな」

勇介が、姉弟に背を向けた。和臣と真帆も、彼に従う。

「あ……見ててくれないんですか？」

「ん？ 露出願望もあるのか？」

「違います。でも……ユリが溺れたら……」

「心配するな。赤外線ドップラー・モニターで監視している」

勇介が、尋海の正面に据えた三脚を指さした。

「腹筋が三十秒以上動かなかったら警報を鳴らして、水車を上向きに止めるようにしてある」

「だから、安心して頑張れ」

三人が土蔵から出て、扉が閉まる。

「尋海、無理はしないで……」

悠莉愛の身体が水平になったところで、水車が急速に逆転して、顔を水面下に沈めた。複雑なパターンがプログラムされているのか、ランダムな動きなのかはわからないが、悠莉愛は一瞬たりとも気が抜けない。

しかも、身体がまっすぐに立つあたりでは冷水を頭から浴びせられる。

水を吸い込まずに息をするためには——顔が水面から五十センチくらいはなれるまでは息を止めていて、それから大急ぎで深呼吸をして、直立するあたりでは絶対に鼻から息を吸わない。

しゃべったためにそのパターンを乱して、悠莉愛はまた水を呑み込んでしまった。

姉が苦悶するさまを見て、尋海はますます

速くペダルを漕ぐ。

「ごめんね……」

荒い息の合間に、悠莉愛は弟に謝った。しかし、漕ぐのをやめろとは、もう言わなかった。尋海の頑張りで、流入量よりも流出量が増え過ぎて、わずかに数センチだが水位が下がった。それで、ずいぶんと楽になったのだ。

「う、くうう……」

尋海が呻いて、がくっとペダルの速度が落ちた。オナホルの刺激に負けて射精させられた、その反動だった。

すぐに気を取り直して、尋海はピッチを上げる。